

---

# 血の盟約

西園寺ルイ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

血の盟約

### 【Nコード】

N8708G

### 【作者名】

西園寺ルイ

### 【あらすじ】

化け物に襲われたあたしを助けてくれたのはバンパイアの男だった。けれど、そいつ……あたしの命を助ける代わりに「お前の血を一生俺に捧げる」なんて言ってきた。冗談じゃない！って思ったのに、気づいたら後先考えず承諾していました……。でも仕方なかったんです。

## 数奇的な出会い（１）

奇怪な事件が起きた。

血が全て抜き取られた状態で遺体が発見されるという不可解な事件。殴られたり斬られたり外の外傷は無く、ただ血液だけが失われている。そして発見された遺体には、決まって二カ所針みたいもので刺されたような痕跡が残っていた。

それを悪魔の仕業だと騒ぐ者もあれば、疫病だと言う者もいた。原因が分からないまま犠牲者が増えるばかりで、得体の知れない怪事件に人々はただ恐れおののいた。彼らはまだ

「ソレ」の存在を知らなかったから。

「最近物騒よねえ……」

親友のカトレアがジャムサンドを頬張りながら呟いた。赤毛でくせのある長い髪が前に垂れてくるのか、片手でおさえながら食べている。

「あの事件のこと？血が抜き取られた状態で遺体が沢山発見されてるってやつ」

「そうそう、それそれ。悪魔のせいだとか疫病だとか言われてるけ

ど、実際どうなのかしら。誰かが手のこんだ殺人をしてるとも考えられるし、もしかしたら血を吸っちゃう獣とかがいたりしてね。原因が分からないのが怖いわ。ねえ、ナタリーはどう思う？」

どうと言われても……。実際血を抜かれた死体を見たわけでもなく、ただ人から人へと口コミで伝わってきた話だから何とも言えない。

「怖いと思うけど……。ちょっと分かんない。だって実際に見てないし」

自分の目で確認したこと以外あまり信じないナタリーは、恐怖心というものが湧いてこない。

「相変わらずねえ」

カトレアは長年付き合ってきたナタリーの性格をよく知っているから、今回の事件のことも特に変わりなく話す彼女に感心した。村の人はみな恐怖しているというのに。冷静というか合理的というか

「ナタリー、私そろそろ家に戻るわ。手伝いしなきゃ」

「うん、わかった。頑張つてね」

親友に手をふり、別れを告げるとナタリーも家へと戻った。

ナタリーは石造りの家に一人で住んでいた。両親も一緒に住んでいたのだが、二年前に両親が旅行に出かけた時、ちょうど両親が乗っていた馬車が激しく転倒、そのまま二人は帰らぬ人となってしまうた。たまたまナタリーはカトレアの家に泊まっていたので、ナタリーだけは無事だったのだ。

一人で生活するようになってからはや二年。ナタリーにはずっと欠かさずに続けてきたことがあった。亡き両親の冥福を一日二回祈るのだ。朝起きてから一回、寝る前にも一回、必ず十字架に祈る。亡き両親に一日の出来事を話したり、元気にやっていますと報告したりした。

そうすることによって一人の寂しさをまぎらわそうとしていたのかもしれない。

ナタリーは帰ってくるやいなや、両親の形見にしている十字架に挨拶すると、再び外へと出かけていった。

外は気持ちのいい昼下がり、村は陽気に包まれてぽかぽかと暖かい。広大に広がる田畑や、ところどころ家が集まって集落ができている。この村は自然に恵まれていて非常に美しい。

ナタリーはこの村が好きで、特にこれからいく場所はもつと好きだった。村のほずれ、少し森の中に入っていくとそこには古い教会がある。

今は使われていないが、森の中にひっそりと建つ教会のステンドグラスは見事なもので、ナタリーはそれを見たくてよくここへくる。光輝くステンドグラスが心を喜喜とさせてくれるから。

片方の扉がはずれてしまっているが、壊れていない方の扉をキッと音をたてて開けると、誰もいないであろうと思っていた教会の中に人がたっていた。教壇のちょうど手前あたりに、全身黒ずくめの長身の男の人。後ろ姿だから顔は分からない。

誰だろう……。いつもはこんなところへくるのは自分くらいなのに。

村人の誰かかもしれない。

「……あの…あなたもステンドグラスを見にここへ？それともお祈りですか」

努めて明るい声で話しかける。ところが教会の中で立ち尽くす人は、答えるどころか振り向きもしない。

聞こえていないのだろうか。

「あの………、旅の方ですか…？」

すると長身の男は首を少し左に傾けて、

「お前は村人か？名は」

と聞いてきた。

人にもものを尋ねる時は自分から名乗れ、と思ったが、少し高慢そうなそれでいてよく耳にとおる心地良い低音にそんな感情は打ち消されてしまった。

「私はナタリーです。ナタリー・ライアード。あなたの言うとおりすぐその村人です。あなたは？」

男はフンツと鼻をならすと、

「人間に教える名などない」  
と言った。

人に名前を尋ねといて自分は名乗らない、その上人を小馬鹿にした失礼きわまりない男の態度に腹がたつ。  
しかも

「人間に教える名などない」とか、まるで自分は人外の者であるかのような話し方に変な人に会ってしまったと後悔する。

こういう人には極力関わらないほうがいい。どうやら村人では無さそうだから、ナタリーはさっさと村に帰ろうとした。「じゃあ…私帰るんで。さようなら」

一応相手の失礼にならないようにお辞儀した。変な人に絡まれないようにするには、無視するか自分が身をひくかしておかないといけないと思ったからである。

ここで相手の高慢な態度に腹をたてて何かされたのではたまったもんじゃない。

後ろを振り向いて教会の出口を目指そうとした時、ドンツと何かにぶつかった。

「痛っ」

教壇の前にたっていた男だ。

いつの間に回りこんでいたんだろう。

尋常じゃない速さだ。

「な…何ですか。私家に帰るんで。そこどいて下さい」長身の男を見上げる。

そこにあっただのはひどく美しい顔。

肌は透き通ったように色白で、蒼白に近い。

漆黒の髪が揺らめいて、前髪が目につつすらとかかっている。

そしてなによりも驚いたのは瞳の色。

赤い、妖艶な光を放っている。

「お前はここに何しにきた」

男の声にハツとする。

「…ステンドグラスを見に…でも、もう見たからいいです。そこどいて下さい」

村人でもなく、旅人にしては荷物の一つも持たないこの怪しい男と関わってはいけない、と思い男を避けて帰ろうとすると足止めをくわされる。

「待て。お前から旨そうな匂いがする」

「…食べ物なら持ってません。あなたの気のせいじゃないですか」  
つくづくおかしい事を言う男にナタリーは少々苛立ちをみせながら、足早に出口へと向かった。

「旨そうな匂いがするのは、お前の血だ」  
血、という単語に足がとまる。

今なんて…？血が美味しそう？何言ってるの。

ふと頭に怪事件が思い浮かぶ。血が抜き取られるという怪事件。男がゆっくりと近づいてくる。

ナタリーは後ずさった。

じわじわと距離をつめられて、背中が壁にトンと音たててついた。気づくともう後はない。

男は面白そうにナタリーに近づくと、両腕を壁についた。

「あなた何者…。血が美味しいって、あなたがあの事件の犯人なの」

「あの事件…？…ああ、あの下等な奴らが起こしてる怪事件ってやつか。あんな奴らと俺と一緒にしてもらっちゃ困る」

犯人を知ってるような男の口ぶりに、ナタリーは何か聞き出せないか試みる。

「あなたは犯人を知ってるの。それは誰？」

「さあて。知ってるような知らないような」

明らかに犯人を知ってるくせにもったいぶってニヤニヤしてる男に腹がたつ。

「それより血をくれ。腹が減っている」

男の瞳が妖しく光り、ナタリーは男にいきなり抱き締められた。

「ちよっ…！？」

突然のことに驚いていると、首筋にブツリ…と音をたてて痛みが走った。

「っ…!？」

首筋に顔を埋めてる男の喉元がゴクリ…ゴクリ…と音をたてているのが分かる。心臓の鼓動にあわせて送りこまれる血が男に奪われていく。

なにこれ…。私の血を飲んでの…いやあ…!

恐怖で顔が真っ青になる。

やっぱり血が抜き取られるという怪事件の犯人はこの男？ならば今男がしてる行為を阻止しなければ自分は死ぬ…。

…やだ…死にたくない。

死にたくない……なのに血が奪われていくせいか体に力が入らない。

恐怖に一筋涙をこぼすと、男は何かを警戒するように顔をあげた。

解放された安心感に力が抜けてその場にヘタリと座り込む。

「フンツ…、下等な奴がお前の血の匂いに誘われてきたみたいだ」

男は、二人以外誰もいない教会の中を見渡して、ナタリーには見えない何かを感じとっているようだ。「来たぞ」

男が目線を天井に向けた。ナタリーも視線を上にあげていく。するとそこに黒い何かが張り付いていた。

「ひっ…」

教会の天井に張り付いている黒いもの…頭と胴は人の形をしているが、手足が六本あって、まるでクモのように広がっている。突如現れた「ソレ」の頭がギギギ…と音をたてて回り、明らかにナタリーを見つめている。

気味が悪い

「ソレ」と目が合って、ナタリーは恐怖に震えた。

「その…女の……生き血を……すすり…たい

…すすりたいいい…!…」



男と女の声が同時に混ざりあつたような声で、

「ソレ」が叫んでくる。

「あれがお前が言っていた怪事件の犯人だ。最近はいづらの数が極端に増えてな。それよりお前狙われてるぞ？生き血をすすりたいってさ。熱烈にラブコールされてるが、どうするんだ？」

男がクツクツとおかしそうに笑っている。

笑っている場合じゃないだろう！と怒りたいが、少々貧血ぎみでそんな気力がない。

「…あなたは私を助けてくれないわけ…？」

力が抜けて一人で動けない今、頼みの綱となるのは目の前の男しかない。

「なんで俺が」

上機嫌に笑っていた男があからさまに嫌そうな顔をする。

「私の血、あげたでしょ！！」

「俺に恩を売る気か。いい度胸だな。だが………まあいいだろう。お前の血は特別に旨かった。この先も俺にその血を捧げるなら、助けてやってもいい」

勝手に人の血を吸つといて、その上この先も捧げると？冗談じゃない！…が、ドオオツツと大きな音をたてて

「ソレ」が降りてきた。ズルズルと這いつくばって迫ってくる。

「血が……ほしい………ほし………その女の血……よこせえええ！！！」

「ソレ」が大声をあげて突進してきた。

「あゝあ、お前もアイツに体中の血、全部吸われておさらばだな」  
あんたも吸っただろう！と言いたいが、突進してくる

「ソレ」とこの男じゃ危険度の違いなどはつきりしていた。

ここで血を全部吸われて死ぬか、この先ずっとこの男に血を捧げて生き延びるか、不本意だがナタリーの心の中は決まっていた。

「わかった！あんたに血、あげるから早くアレを何とかしてっ！！」  
すぐそこまで

「ソレ」が迫ってきてもうダメだと目を瞑った瞬間、ドガツと鈍い音がしてガシヤアアアン！！とステンドグラスが粉々に割れた。

「きゃあああ！！」

凄まじい音にナタリーは絶叫した。そつと目を開けると教壇側にあつた大きなステンドグラスは粉ごなに砕け、ぽつかりと大きな穴が開いていた。

男はというと、さっきと全く同じ場所につつたって一歩も動いた形跡がない。

「あ、終わったぞ。アレはもう死んだ」

「嘘……」

一体なにをしたのだろう。男はその場から動いた形跡がなく、ただ凄まじい音がして気がついたらアレがいなくなっていた。

「嘘だと思うなら外に行けばいいだろう。グチャグチャになつてゐるの見たいんだつたらな。それと、さっきの約束は守れよ？いいな」

「わ……わかつてる。………というか……あなた本当に何者……？」

「本当に分らないのか。田舎じゃ情報が遅れてゐるのか知らないが、俺はバンパイアだ」

「バンパイア……が何でここに……」

「そんなのお前に話す気ない。それよりここを離れたほうがいいんじゃないのか？お前からまだ血の匂いがぷんぷんしててアイツらまた寄ってくるぞ」

だから出血したのはあんたのせいでしょ！

と言いたいが、まだふらふらして怒鳴る元気がない。

「ねえ……私を家まで運んでくれる？」

「だからなんで俺が」

「貧血だからよ……立てないんだつてば。家に帰って栄養とらないと私あなたに血をあげられないんだけど。よく分かんないけど私の血、おいしいんでしょ？」

そう言うバンパイアの男は渋々ナタリーを担ぎ上げると

「家まで案内しろ」と言って運んでくれたのだった。

こうして謎のバンパイアと出会い、約束を交してしまったナタリーがこの後波瀾万丈、奇々怪々な生活が待っているとは夢にも思わなかった。なかった。

## 数奇的な出会い（1）（後書き）

こんにちは。読んで下さった方ありがとうございますm（――）m  
今回は謎の男の名前を出さないで終わってしまいました（^^^^  
しばらく出さないかも。結局分かったのはナタリーとカトレアだ  
けでしたね。でもこれからどんどん登場人物を出していつて絡ませ  
ていきたいなあと思ってますのでどうぞよろしくお願いします。

## 数奇的な出会い（2）（前書き）

第1話 数奇な出会いのすぐ後のお話になります。

## 数奇的な出会い(2)

「ねえ…なんで家にあんたがいるの」

ナタリーは不機嫌な表情でベッドに横になる男を睨みつけた。

「お前が約束したからだろう。俺に一生血を捧げるってな。早く俺のために血を生産しろ。こっちはさっき雑魚一匹殺すのに力を使って腹が減る一方なんだ」

悪びれもせずナタリーの家にあがりこみ、足を組んで寝転がっている。

「血をあげる約束はしたけど家にあがっていいなんて言っていないってば。私は貧血で足がおぼつかないから、家まで運んでって言っただけ！」

「…それが俺に対するセリフか？この場でお前の血、全部飲んでやつてもいいんだぞ人間」

体を起こすと、ナタリーに近づいて強迫する。

ナタリーは一瞬ひるむも、負けじと対抗した。

「別にそれでもいいけどあなたが私の美味しい血二度と飲めなくなるだけだものね！」

確かにこの女の血の味は甘美で極上の味がした。こんなに美味しい血は滅多にないだろう。

一度味わったら忘れられない。そんな味だった。

それをひと飲みしてしまうのも勿体ない。

男は黙って再びベッドに横になると、腕を枕にして眠ってしまった。

「ちよつと、だから出ていってって言ってるじゃない…！」

叫んでも注意しても返事はなし。

なんなのこのバンパイアは！自己中すぎるッ！

ナタリーは扉を乱暴に閉めるとリビングの椅子に座った。

外見は人間でも、あの男は人ではない。それに命を助けてもらっためとはいえ、血を提供し続ける約束をしてしまったことを後悔する。

誰かに相談しようか。すぐ思い浮かんだのはカトレアだった。

「ううんだメダメ！カトレアにこんな話できるわけない！それにあんな危険なヤツがカトレアに会ったら何をするか分からないし…」

神様：どうか何もおこりませんように。お父さん、お母さん、どうかナタリーを見守っててください。壁にかけてある十字架に向かって堅くお祈りする。とにかくあのバンパイアには出ていってもらわないと。家には置いておけない。

意を決してもう一度バンパイアの眠る部屋の扉を開けた。

だが、そこには眠っているはずのあの男がどこにもいない。

「あ…あれ？いない…」

出ていってくれたのだろうか。

とりあえずいなくなってくれてホッと安堵する。

「良かった」

パタンと扉を閉めるとノックの音がする。

誰かきたのだろうか。もしかしたらカトレアかもしれない。

「はい」と声をあげて玄関へと向かう。パタパタと階段をおりて扉を開けた。

「ナタリー、こんばんは！」

そこにはナタリーの予想どおりカトレアが立っていた。「ねえナタリー、夕飯一緒にたべましょ？」

ニコニコと上機嫌なカトレアに、ふっと笑みがこぼれる。

「うん。中にはいつて。カトレア」

「お邪魔します」

「カトレア、なんかご機嫌だね。何かいいことあった？」

「うん。実はね、さっきすごくかっこいい人見たのよ」

「へえー」

カトレアは目をキラキラ輝かせている。

ナタリーはまたカトレアの悪い病気が始まったと呆れるかえる。カトレアは少しでも異性に優しくされたり、容姿の綺麗な異性をみつけるとすぐに惚れこんでしまうのだ。

「今日はね、私が出た男の人の中でも特別にかっこ良かったのよ。」

「ふーん」

「ナタリーは興味ないのー？つまらなそうに聞かれると私悲しくなるんだけど」

とは言っても夕飯の支度をしている途中で話しかけられては、集中できない。

「で？どんな人だったの？」

仕方なく話を聞いてあげる。

「それがね、黒髪で赤い瞳をした背の高い男の人だったのよ。珍しいわよね。旅の人かしらあ」

黒髪に赤い瞳…。

思わず手がとまる。

「……そ…そう。良かったね」まさかあのバンパイア…いなくなっ  
たと思ったら村中ほつき回ってるんじゃない？」

…ううん。気にしない気にしない。いなくなってくれた方が有難いし。

カトレアも何もされてないみたいで良かった。「あれ？ナタリー、  
首どうかしたの？」

バンパイアに血を吸われた傷を指摘されてギクツとする。

一応布をあててあるから直接傷が見えることはないのだが。

「あ…ちょっとね。今日不運にも棚から物を取りだそうとした時に物が落ちてきちゃってぶつけたの。痛かったあ」

とっさに嘘をつく。

「うわあ…痛いじゃない。気をつけなさいよナタリー」「んー。  
気をつける」

嘘ついてごめんね、カトレア…

心の中で、自分を心配してくれる親友に向かって謝った。

その日の夕飯はカトレアが来てくれたおかげで、ナタリーは楽しい



一時を過ごした。

唯一無二の親友、カトレア。彼女はナタリーが両親を亡くしてから特に、ちよくちよく遊びにきてくれる。ナタリーが一人で寂しくないように、気づかってくれてるに違いない。

「ありがとねカトレア」

「やあねー、急にお礼なんか言っちゃって。変なのー」

あはは、としばらく会話した後、カトレアは自宅へと帰っていった。

長い長い一日がやっと終わる。ナタリーは家の扉に施錠すると床についた。今日はいろんなことがあった。教会に行ったら変な黒ずくめの男と出会い、人ならぬモノに襲われた。

思い出すだけで身震いをする。あの黒い化け物…、一体どこから現れたのだろう…。怪事件がおきたという話は耳にしていたが、それは人事で、どこかで自分には関係のない話だと思っていた。

でも、見てしまった。あの化け物を。

飢えたように血を激しく求めておそいくる化け物を。

もうあの教会にはいけない…。また今日みたいなことが起こったら嫌だし、大好きだったステンドグラスも壊れてしまったから。

目をかたく閉じ、布団を頭までかぶった。

お父さん、お母さん…一人は怖いよ…。辛いよ。どうして死んじやったの…。

感傷に浸っていると、窓からコンコン…と音がした。

気のせいかと思いきや、音はいっこうに鳴りやまなくて。

コンコン……………コンコン…

そんなはずはないとナタリーは耳をふさいだ。きつと幻聴だ。だってこの家は二階建て。ナタリーがいる部屋はまさに二階で、こんな高い位置にある窓をノックできるはずがなかった。

こんなことできるのは化け物くらいだ…。

まさか…教会に現れた化け物がまた…？

昼間の恐怖と今起こっている事実が重なる。  
いやぁ…、こないで…

ブルブルと肩が震える。

怖い……………

怖い……………！

「おい人間、ここ開ける」

「…？」この高慢なしゃべり方は……

あのバンパイア…？

途端に心から恐怖が消えていく。

「いるんだろう。開ける」

高慢な態度は氣にくわないが、彼がいると何故か心に余裕ができる。  
教会であの化け物をいとも簡単に倒すほど強いからなのかだろうか。  
よく考えたら、彼も化け物も吸血行動というやつてることには大差  
ないのに、彼には怖いという感情はあまり生まれてこない。

「早く開けないとここ割るぞ。いいのか」

窓ガラスを割られたら地味に修理費がかかってしまう。彼の脅しに慌ててカーテンを開け、窓の鍵を開けた。

カーテンを開けた時、満月をバックに彼が窓枠にしがみついて侵入しようとしている体勢で、まさにバンパイア、という感じだった。シユタツと軽やかに床に降りたつ。

一体どこに行っていたのかは知らないが、何も二階から入ることはないと思う。しかしまさか戻ってくる、とは思ってなかったから意外だった。

「あー眠い」

「……なんでバンパイアが夜眠くなるのよ……」

「うるさい、人間。黙れ」

「ナタリーだってば。ちゃんと名前あるんだから、呼ぶなら固有名詞で呼んでよ」

昼間もフルネームで名乗ったではないか。

「いーや、お前なんか人間で充分だ」

「じゃああなたの名前教えてよ……」

「断る」

やっぱり……。人には名前を聞いたくせにその名で呼ぶわけでもなく、自分は名乗ろうとしない。勝手すぎる態度にほとほと呆れて寝ることにした。

ナタリーは彼が入ってきた窓に鍵をかけて、カーテンを閉めた。

「私寝るから。バンパイアさんは隣の部屋とか開いてるからそっち使えば……?」

一言だけそう伝えたと、布団の中に再びもぐって目を閉じた。さっきまで恐怖で眠気などなかったが、今はゆったりとした睡魔の波が襲ってきて、気持ちよく眠れそうだ。

「ナタリー・ライアード……か」

ナタリーが完全に眠った横で、バンパイアの男は静かにそう呟いた。



名はエリクソン（前書き）

前回のすぐ続きになります。

## 名はエリクソン

柔らかい日射しがさしこんでくる穏やかな朝。布団にもそもそくるまって夢心地にひたっていると、下から何やら騒がしい音がする。せつかくもう一眠りしよう、とうとうとしていた所なのに非常に耳障りである。すると物音はどんどん大きくなってきた、部屋の扉が壊れるんじゃないかと思うくらいの勢いで開いた。

「おいっ！！ナタリー、お前飯食え！いつまで寝てんだ」

綺麗な顔をした黒髪の青年が入ってきた。

そう、彼はナタリーの使用人…

「早く飯食って血液増やせ。俺の食事がかかってるんだぞ！」

…ではなく、最近居候しはじめたバンパイアである。名前はまだ知らない。

ナタリーは布団にくるまったままゆっくり身を起こした。

「ちよつと…、いきなり女性の部屋に入ってくるなんて失礼じゃない。着替えるからあっち行ってよ」

布団をすっぽりかぶって身を隠す。

男はそんなナタリーの言うことなど聞かずにツカツカと部屋に入ってくると、布団をナタリーから取り上げた。

「！？やだあっ」

寝間着姿が露になるのを防ぐように丸くなる。

「誰がお前なんかの寝間着姿見てムラムラするか」

「…………。馬鹿っ！変態！」

ナタリーは手元にあった枕で男を二、三度殴ると、かけてあった力ーデイガンをはおると勢いよく部屋を出た。

失礼なヤツ！いきなり部屋を開けるわ、そのまま中に入ってくるわ、布団ははぎとるわ、デリカシーの無いバンパイア！

ナタリーはリビングの椅子に腰かけると、目の前の料理を口に運んだ。

「なんなのもう！イライラするっ……………って……………え…？」

無意識のうちに口に運んでいたが、これは一体誰が作ったのだろう…。

一人暮らしなので食事はいつも自分で作っていたが、今日は起きたばかりで作るどころかキッチンすら立っていない。

「……………」

「あ？なんだ。まだ食ってないのか」

髪を掻きあげながらバンパイアの男が二階から降りてきた。

「…この料理…誰がつくったの…」

男は皮製の椅子にドカッと座ると自分を指差して

「俺」と一言。

「……………へ？」

何を言っているのだろうとぽかんとする。

「なにボケツとしてるんだ…。早く食え」

「え…、あ…はい」

バンパイアが料理したの…？妙な感じだが、さっき

「飯食って血液を増やせ」と言っていたから、おそらくそのためだろう。

…だけど、わざわざ自分で作って食べさせるんだ…。

変なの。最初から変なバンパイアだけ。夜は眠いつて言うし、朝早く起きて朝食は作ってくれてるし…。

チラッと男を盗み見ると目が合った。というより頬杖をつきながらずっとナタリーが食事をしているのを見ているのだ。

「な…何？見られてると食べづらいんだけど…」

「早く血が欲しいと思って」

ガクツとする。結局この男は血のことしか考えてないんだ。

別に違う答えを期待していたわけではないのだが。

「…このスープおいしい…何入れたの？」

会話無しでは気まずいので料理の感想を言ってみる。

「それは魔…」





表情で首筋に顔を埋めてる。

ナタリーはその顔にどこか色っぽさを感じてドキリとしてしまった。綺麗な顔…。透き通るような肌に黒髪が映える。

男はやっとナタリーの首筋から顔を離すと、唇についた血液をペロリと舐めとった。

ナタリーは、吸血行為が終わったのを確認するとすぐに止血の処置をした。また血を奪われたせいか頭がはつきりしない感じがする。少々よろめきながらトサツと皮製の椅子に腰かけると目を閉じた。意識がぼんやりとして、このまま眠れそうな倦怠感がある。

「お前の血、旨かった」

男がぼそりと呟いた。

ナタリーは少し目を見開いて

「良かったね…」と力なく答えた。

「眠いのか？」

血を飲んで満足したのか優しく問いかけてくる。

「うん…」

コクコクとゆっくり頭を上下させて頷く。

このまま寝ちゃおう。再び目を閉じて寝息をたてようとした時、コンコンと扉を叩く音がした。

ナタリーは重たい瞼を開けると体を起こして来客の応対しようとした。ところが体を起こそうとした時に、男に制止されてまた椅子に座らされてしまった。

代わりに出てくれるのだろうか。有難いが彼の姿を見られるのは厄介だった。まず見られたら彼とナタリーの関係が問われるだろう。名前も知らない相手なのに。わかっているのは彼は人間じゃないこと。それだけだ。しかし、倦怠感で体を動かすのが億劫だ。

もうどうでもいいや、と思っていると扉がガチャと開いて、女の叫び声が聞こえてきた。

「きゃー！ー！！あなたは黒髪の王子様！？なんでここにっ！？」

甲高い女の声。

カトレアだ。

黒髪の王子って…。バンパイアのこと？ダメよカトレア、そんなやつに恋しちゃ。その男人間じゃないんだから。

「アンタ、誰」

無愛想な声。

「初めまして、私カトレアですう。ナタリーの友達の！黒髪の王子はなんでナタリーの家に？もしかしてナタリーの知り合いですかあ？」

どこか可愛こぶりつこな態度で男にアプローチをかけてる。

カトレア、お願いだからそいつだけはやめなさい！

と言いたい力が抜けたようにぼーっとして動けない。

「あ？俺はナタリーの……………」

言葉に詰まる。なんて言ったら都合のいい関係になる？

「ナタリーの…何？言いづらいこと？まさか恋人…とか？」

「！そう、それ」

は！？

何言ってるんこの男は！ただ単に思い付かなかっただけでしょ。

「ええええー！！！！！！ナタリーの恋人！？嘘ー！！」

嘘よカトレア。信じないで。

「い…いつから？」

「昨日から。もう同棲中」

違うのカトレア…ただの居候よ。しかも人間じゃないんだから。

「同棲！？いつの間に！！……………そんなー…私黒髪の王子のこと狙ってたのに！。でも、親友の恋人だったんじゃ仕方ないわね。友達として応援してあげなきゃ。あの、ナタリーいます？」

「いるのはいるが、ナタリーはちょうど寝るところだ」

「寝るって今お昼ですけど？…もしかして具合悪いんじゃない？ナタリ

ー！！」

バンパイアの男を押し退けて部屋に駆け込む。入ってすぐにナタリ

ーの姿が見えて、おでこに手を当てた。

「ナタリー大丈夫！？具合悪いの？」

「……………うん。眠い」

ナタリーが欠伸をしたのを見てホッと胸を撫でおろす。

「なあんだ。眠いだけなのね？良かった。ナタリーは一人暮らしで無理しちゃうところあるから気をつけるのよ？でも、恋人と住むようになったから前よりは安心ね」

実際は逆なんだけど、カトレアが気遣ってくれてるのは嬉しいので「うん」と頷いた。

「ナタリー、椅子で寝たら疲れちゃうわ。寝室で寝ましょ？……ってあら……寝ちゃった」

スヤスヤと安らかな寝息をたてはじめたナタリーを見て、カトレア曰く黒髪の王子に向き直ると、

「ナタリーを二階に運んで下さい」

と言った。

バンパイアの男は面倒くさそうにしながらも、恋人と答えてしまったので仕方なくナタリーを抱き上げて寝室へと運んだ。

「ナタリー羨ましいわあ……。黒髪の王子様にお姫様だっこされてるう」

ナタリーを軽々と抱き上げて運ぶ男の後ろ姿を見やりながらカトレアが羨んだ。

「あの、ナタリーを幸せにしてあげて下さいね！じゃあまた」

男の後ろ姿に一言そう言っていると、カトレアはライアーD家を出ていった。

それをみて男は安心したような疲れたような溜め息をつくとき、ナタリーをベッドに寝かせた。

思えば自分が人間の世話をしているなどおかしい話である。

「俺、何しにきたんだっけな……」

頭をポリポリ掻いてると背後から声がした。

「何しにつて忘れないでくれよエリクソン」

振り返るとそこには、男と同じ赤目を持った銀髪の青年が立っていた。

「ツバイ？なんでお前がここに？」

「その台詞そっくりそのまま返すよ。君が人間の家になんでいるの。エリクソン、君は元々あの下等生物を排除するために来たんでしょ。こんなところ用はないはずだよ？」

「ああ…そういえばそうだったな」

「全く…全然アレの数が減ってないからおかしいと思ったよ。君程のバンパイアならあんなヤツら一掃できるでしょ。こんなところで油売ってないで僕と行こう？」

本来の目的を忘れてもらっちゃ困るとツバイは呆れ顔で外へ出ようとするが、バンパイアの男…エリクソンは動く気配がない。

「どうしたのエリクソン？行くよ」

「…………いや、ここで寝てる女の血を一生もらうと盟約を交したんだ。だから…」

「ふーん…？」かなり旨い血、に反応してツバイが眠ってるナタリに近づいていく。

「…確かに美味しそうだね。味見したくなるよ」

ツバイの瞳が妖しく光り、ナタリーの白い首筋を捕える。

そのまま吸い込まれるように顔を近づけて牙で貫こうとした瞬間…

ゴスッ

鈍い音がしてツバイの後頭部に痛みが広がっていく。

「い……………った……………何？なんで殴んの……………？」

エリクソンが拳を高々とあげて二回目の攻撃体制に入っている。

「それは俺の獲物だ。手え出すな」

威圧的に上から見下ろしてくるエリクソンが妙に陰っていて怖い。

「ごめんっ…！悪かったよエリクソン！つい味見したくなって。」  
エリクソンが独占したくなるほどこの女の血は美味しいのだろうか。  
ツバイはますますナタリーの血に興味を持った。

「…ん…、バンパイアが目の前にこんな美味しそうな見つけたら確かに動きたくはなくなるよね。でもさ、たまには仕事してよ？  
アイツら弱いくせに数は半端ないから僕たちの餌になる人間がどんどん消えていつちやうかも知れないしね」

「分かってる。しかし面倒だ。出来損ないバンパイアのアレの処分を俺たちがしなくちゃならないなんてな」

「出来損ないのバンパイア…？？？」

突然の女の声。

エリクソン、ツバイは一斉にナタリーを見た。

「あらら…お嬢さんはお目覚めみたいだね。どこから話聞いてたのかな？」

見しらぬ人物の登場に布団で半分顔を隠す。

「…誰…？」

「僕はツバイ。エリクソンと同じバンパイア」

「エリクソン…？エリクソンで……」

チラッと男のほうを見る。

「あ？俺の名前だ。悪いか」

フィツとナタリーから視線をそらす。

別に悪いとか悪くないとかないんだけど…。

「あのねー、エリクソンは照れ屋だから名前はなかなか教えてくれないんだよ。初対面の時教えてくれなかったでしょ」

そういえばそうかも。人間嫌いだから教えなくなかったのかとも思っただ、照れ屋…と言われればそうなのかもしれないとナタリーは思った。

「あと君の名前は…」

「ナタリーです」

ベッドから身を起こすとツバイに簡単に自己紹介した。

「ナタリーね、よろしく。あ、さっきの話だけど出来損ないのバンパイアは世間を騒がしてるやつらのことだよ。俺たちはね、そいつらを排除するためにきたわけ。だってアイツら俺たちの大事な食糧をどんどん殺しちゃうからね。ま、でも君は大丈夫みたいだよ？ エリクソンが君のそばにいたいみたいだし、いざとなったら守ってくれるよ」

え？

エリクソンが私のそばにいたい？

「おい、誤解を招くような言い方するな。俺がこの女に惚れたみたいだろう。ただの餌だ餌」

餌……。そうね、私はただ血をあげるために生かされたようなものだよ。「はいはい分かってるよエリクソン。じゃ、僕はそろそろいくな。エリクソンも本当に仕事してよ？ じゃあね」

ツバイは寝室の窓から身を乗り出すとそのまま飛び降りてしまった。

「きゃあ！？」

「……アイツも人間じゃないんだ。飛び降りたところで別に死にやしない」

エリクソンが落ち着いた声で説明する。

それにしても心臓に悪いとナタリーは思った。

エリクソンはツバイもいなくなり、ナタリーの部屋を出ていこうと扉に向かって歩き出した。あわててナタリーが声をかける。

「待って！あのね……」

エリクソンが立ち止まる。

「エリクソン……。エリクって呼んでいい……？」

それはなんでもない、ささやかなお願い。

ただ、名前を教えようとしてくれなかった彼には言いづらくて、ナタリーはおずおずと尋ねた。

「………………。好きにしる」

エリクソンはナタリーを振り向きもせずになつと、部屋

を後にした。

## バンパイアの力

バンパイア…

それは人の生き血をすすり生きる魔物である

見た目は眉目秀麗…人と変わらぬ姿をし、血を奪う機会を密かにうかがっているのだ…

「ナタリー…おい！ナタリー」

頬をぺちぺちと叩かれて目を覚ます。

「なに……うるさいなあ……」

「呑気に寝てる場合かお前は。アレがこの村に近づいてる。数は二匹だ」

「え!？」

アレとは世間を騒がす人ならぬ怪物のことである。バンパイアのように生き血を求め、一度喰らい付くと血液を一滴残らず全て吸いとってしまう恐ろしい存在である。

エリクによると、出来損ないのバンパイアというものらしい。

「またアレが…？最近多くない？エリク、なんとかしてよ」

「分かってるが…。ってお前に指図される覚えはない」

エリクは不機嫌になるとなかなか言うことを聞いてくれない。



というか自分が一番という考えで、人間を皆見下している。バンパイアの彼にとっては自分はただの食糧なのだ。特にナタリーの血は美味らしく、怪物に襲われた時に助けてやる代わりに血を捧げると言ってきた。ナタリーもその時は死にたくない思いが強くてついOKをだしてしまったのだが、今になって後悔している。

エリクはほとんど毎日ナタリーの血を求めてくるからた。たまにならまだしも、ほぼ毎日吸われてはいつも貧血ぎみになってしまい大変なのだ。

その内本当にパツタリ死にそうで怖い。

「お願いエリク、村を守って？私にとってはこの村が全てなの。お父さんもお母さんもいなくなって……ひとりになった私を助けてくれたのは村のみんなだから」

両手をあわせて、一生懸命お願いする。

正直怪物に対抗するような武力はこの村にはない。

王都や栄えた町ならまだしも、田舎の小さな村にはそんなものは全くない。みな温厚な性格で武力とは無縁なので、怪物対策もしてないから太刀打ちできるのは目の前のエリクただ一人だけだ。幸い彼は力の強いバンパイアらしく、話せばなんとか聞いてくれるし、もともと怪物討伐隊のようなものらしいので大抵は勝手に退治してくれる。

だから世間ではかなり騒がれている怪物も、この村にはまだ侵入してはいないのだ。

だが、その代わり怪物を倒して帰ってくるなりエリクは疲れたと言つてナタリーの血を求めてくるのだ。

そんなに頻繁に吸わないと死んでしまうのだろうか？と質問したところ、無視された。エリクは自分に都合の悪い質問だとすぐ無視するので、どうやらそうではないらしい。

ただ単に美味しいから吸いたいただけなのだろう。

「エリク……お願いします。村を救って下さい」

「……………」

「お願い！」

「……………わかった。行ってくる」

エリクソンは面倒くさそうに立ち上がると、怪物がくるであろう方角を見つめて窓から出ていった。

ナタリーとしては窓枠が汚れるので玄関から出て行って欲しいのだが、それを言ったらさらに不機嫌になってしまいそうなので我慢した。

エリクソンは人並みならぬ速さで村を走りぬけていくと、遠くに黒い物体を発見した。近づく和二匹の怪物が旅人らしき人間をくわえて生き血をすすってるようだ。

「……血……血が欲しい……」

「うまい……足りない……足りない……」

二匹の怪物は男女の声が入り混じったような気味の悪い声を発しながら生き血をすすっている。

「ハア……。なんでこんなやつらの相手をしなきゃならないんだ俺は」溜め息をつく、怪物の一匹がエリクソンに気づいて振り返る。

「お前の血も……欲しい……欲しい……」

「は？ふざけんな。誰がやるかよ」

怪物はギギギ……と軋むような音をたてながら姿勢を低くして、攻撃体勢に入った。

「……血……うまそうな匂いだ……………」

怪物は舌舐めずりするとエリクソンを見て呟いた。

「そんだけ血い吸つといてまだ足りないのか。貪欲だなお前ら。……………ま、人のこと言えないか」

「血……血を……よこせええ……………！！……………」

怪物がエリクソンめがけて飛びかかる。高々と飛び上がったそれにエリクソンは余裕の笑みをこぼすと、手の平にポウと光の玉をつくりだし、怪物の開いた口めがけて放った。

光の玉は怪物の口内に見事命中すると、怪物の体内に入り、みるみる怪物の腹が膨れていき、しまいには粉ごなに弾けとんだ。

その時やっと生き血をすすり終わったもう一匹の怪物は、仲間が殺されたのを確認すると一目散に逃げ出した。

「…逃がすか」

エリクソンはニヤリと笑うと走り去っていく怪物に狙いを定めて灼熱の焰を放った。

放たれた焰は勢いを増して怪物との距離をぐんぐん縮めていくと、怪物を丸のみにして焼き付くしてしまった。

怪物の断末魔の叫びが一瞬間こえたかと思うと、そこにはもう、ただの焦げ跡しか残っていなかった。怪物の肉体が焼かれた後の灰すらも残さない、絶対的な魔力。それをもつのがエリクソンなのだ。

「いやーエリクソン。見事だね。僕が出る幕なかったよ」

背後から拍手をしてツバイが現れた。

「お前がいたなら俺は別に闘わなくて済んだのにな。無駄な力使ったみたいだ」

「何言ってるのエリクソン。僕はついさっき駆け付けたばかりで、その頃には君がすでに一匹ぶつとばしてるところだったよ。相変わらず凄い技だね」

肩に手を置いて、まるで上司が部下によくやったと言わんばかりの態度だ。

「それよりアイツらどこから湧いてくるんだ。魔界か？」

「多分ね。あとアイツらに血を吸われた人間がなるみたいだよ。感染してくみたいな。だからそこに転がってる旅人の死体も、その内アイツらみたいになるだろうね」

ツバイが血を吸われつくした旅人の死体を見つめている。というより観察しているに近い。

「じゃあこの死体も処分するか」

エリクソンが死体に手を伸ばそうとした瞬間、倒れていた死体がガタガタと動きはじめてムクツと起き上がった。

「気をつけてエリクソン！くるよ！」

「分かつてる」

二人はいつ攻撃されても瞬時に対応できるよう身構えた。

動きだした旅人の死体は噛まれた部分から皮膚がみるみる黒くなっていき、体全体に広がっていった。

「へえ…こつやつて仲間増やすんだね。知らなかったよ」

「…感心してる場合か。いくぞ」

まだ体が完全に変化しおえる前に倒す。

エリクソンは焰を作りだすと、敵に狙いを定めた。ツバイも続けて人さし指を死体に向けると落雷を落とした。

エリクソンが透かさず焰を放ち、焼き付くす。

二人の攻撃を同時に受けて、ガタガタ動いていた死体は塵となって跡形もなく消え去った。

「はあ…全く疲れちゃうよね。ナタリーに血もらいにいこうかな。

エネルギー補給しないと」

ツバイが村がある方向に体を向けると、エリクソンがツバイに向かって小石を投げつけた。

小石はツバイの頭に見事ヒットし、ツバイはその場にしゃがみこんで頭をおさえた。

「痛いッ！！冗談だよエリクソン。分かつてるよ。ナタリーの血は吸わないよ。……………つていうか本当ケチだなあ。少しくらいいいじゃんか。それともナタリーが好きなの？……………つて痛い痛いッ」

頭めがけて次々とんでくる小石をガードするも、エリクソンのほうが上手で何個かまた頭に当たってしまった。

「馬鹿なこと言ってるなツバイ。ただの食糧だと言っている。それ以上言つと頭かち割るぞ」

エリクソンの表情が険しくなつて本気でヤバイと思つたツバイは冗談を言うのをやめた。

「ごめんごめん。あ！あつちでまた奴らが現れたような気配が！僕行かなくちゃ！じゃあねエリクソン」

ツバイはエリクソンから逃げるようにそそくさと去っていった。

「気配なんかするか。嘘つきめ」

エリクソンはツバイが去った方向をみながらナタリーのいる村へと引き返した。

何しにきたの？

「ハア…倒したぜ」

エリクは一階の窓を開けるとそこからピョンと部屋の中に上がり込んできた。

「ちよっ！窓から入ってこないでよ」

眉間に皺を寄せ、腰に手を当ててナタリーが出迎える。

「あ？別にいいだろう。細かいこと気にしてつと顔中皺だらけになつぞ。」

エリクは自分の眉間を指でさすと、何食わぬ顔で言った。この透かした態度がナタリーの癢にさわる。

「なっ！？あなたなんかただの居候のくせに」

「あゝ？なんか言ったかよ」

「何も？」

ナタリーの文句に不機嫌になるエリクソン。だが、ナタリーはそんなエリクソンを無視してキッチンへと向かった。

ナタリーとエリクソン、この二人は人間とバンパイアという関係である。本来なら出会はずもなかった二人なのだが、世間を騒がす怪事件が起こったことにより二人は出会ってしまった。怪事件と

いうのも、生き血を奪われた人間の死体が数多く発見されるというものであった。それは世界規模らしく、今だ得体のしれない犯人に人々は恐れおののく日々を送っているのである。

だが、ナタリーは知っている。その得体のしれない犯人を。

それはバンパイア。生き物の、得に人間の生き血を好み、突如現れては人々の生き血を喰らっているのである。悍ましい、恐ろしい存在。ナタリーは一度襲われたことがあった。村はずれの小さな教会。そのステンドグラスが好きで、度々足を運んでいたのだが、その時に奴は現れたのだ。黒く、何本もの手足を持ち、男と女の声で血を求めてやってくる。

もうだめ！そう思った時、たまたま出会ったエリクソンに己の血を与える代わり助けてやると言われ、生きたいがためにそのような約束をしてしまったのだった。

それからと言うものの、エリクソンはナタリーの家に居候をし、血をもらってはたまに出現するバンパイアからナタリーを護っているのである。

だが　　。

高慢で口悪いエリクソンに、ナタリーは扱いに困っていた。言うことは聞かない。すぐに血を求める。性格は最悪だった。

（あゝなんであんな人を居候させてるのかしら。）

ナタリーは苛々しながら夕飯の支度をしていた。

（あんな約束するんじゃないかった…）

エリクソンに一生血を捧げる。その約束を解除したい。ナタリーの頭の中はそれだけでいっぱいだった。だが、彼ら人外の者ゆえ、逃がれようと思っても容易ではないだろうと思った。

（そもそもエリク、自分の身の上話した時ないじゃない！バンパイアってことしか分かってないわよ…）

そう考えるとナタリーは苛々して仕方が無かった。と、その苛々が口に出ていたのだろう、エリクソンがキッチンに顔を出してきた。

「あゝ？俺の文句なんかたれてんじゃないぞコラ」

「わっ！なんでいんのよ。あなたはどっか行つててよ。どーせ何も教えてくれないくせに」

「お前が俺のことを知ったとこでなんの利益があんだよ。必要ねーだろ」

「そうかもしれないけど…。でも、ちょっとくらい教えてくれたっていいじゃない…」

気丈な態度だったナタリーが突然シュンと肩を落とすと、エリクソンは調子が狂ってしまう。

（おいおい…なんだよ急にシュンとしやがって）

人間とバンパイアとはいえ、同じ屋根の下で住むようになってから



にはお互いのことを知りあっても良いのではないかと思ったのだ。

「なんだよ。何が知りてーんだ」

面倒くさそうに、けれども仕方ないというふうのエリクソンが折れる。

「！いいの？」

「いいって言ってるんだろ。早くしろよ人間」

（人間ね…。まーたそうやって見下した言い方するのね）

エリクソンに言いたい文句は山ほどあったが、折角教えてくれるチャンスを見逃すわけにもいかなかったので、ここはなんとか我慢した。

「エリクは…どうしてこの世界にきたの？」

「それはだな…。アイツらを減らすためだ。ほら、下級バンパイア。お前だって襲われただろうが。ていうか言わなかったか？この話し」

「？ううん。聞いてないけど。いつ話したの？話してくれたっけ？あ…やっぱり聞いたような…でも忘れた！」

（あ………あれか。ツバイが来た時ちつと話したけど。寝てたんだっただなコイツ。そんで寝ぼけてたかなんかで覚えてないんだな）

エリクソンはいつかの晩を思い出した。

「エリクはあれを下級下級って言うけど、あなたはどうなの？」

「は！？お前俺をアイツらと一緒にしてるわけじゃないよな？そしてたら殺すぞ。……つかバンパイアにだってな、階級みたいのがあって、その中でも俺は上級だ。一緒にすんな」

エリクは拗ねたようにプイツとそっぽを向いてしまった。

（ふーん。そんなのあるんだ。人間と変わらないわね）

「上級と下級の違いって理性があるかないかなのかしら？よく分からないけれど、あなたは人型だけど下級バンパイアは違うわね」

「よく分かってるじゃねーか。あれは出来損ないだから気品も理性もねえ」

「へえ（エリクソンに気品…ね…）」

まさかエリクソンから気品だなどという言葉が聞けるとは思っていなかったので気づかないうちに口元が笑っていた。

「お前…なに笑ってんだよ」

エリクソンの眉間に皺が寄り、額には青筋もたっている。正に殺人鬼のような顔になってる彼にナタリーは慌ててごめんと謝った。

が、彼の怒りは謝っただけでは治まらず、エリクソンはナタリーの肩を乱暴に掴むと壁に押し付けた。

「……っ」

掴まれた肩が痛い。身長差もあり、そもそも男女の力の差がある。ナタリーは抵抗も出来ずに壁に背中を押し付けられて、ただエリクソンに対する恐怖と不安にうちふるえていた。

恐怖するナタリーの首筋にエリクソンの顔がうめれる。

この体勢は……………。

バンパイアの吸血行為時の体勢だ……………。

ナタリーはギュツと目をつぶり、次にくる肌を貫かれる痛みに耐える覚悟した。  
が……………

エリクソンはふつと首筋から顔を離した。

「え……？」

「え？つてなんだよ。つか何その呆けた顔は」

目を大きく開いてパチクリしてるナタリーを間抜け面と馬鹿にするエリクソン。けれど、ナタリーはどうして彼が急にやめたのかが気になって仕方ない。

「だ、だって血吸われると思ったから…」

「ああゝそんなに吸われない？吸ったら吸ったで嫌がるくせに……。今のはな、ただの脅しだ」

はははと可笑しそうに笑うエリクソン。対してナタリーはホッと安堵し、胸を撫で下ろしている。

（今は本当に怖かったんですけど…）

まだ治まらぬ動悸に、ナタリーは自身を落ち着かせようと深呼吸を繰り返した。

そんなナタリーを見下ろし、エリクソンはそんなに利き目があったのかと自負する。

それにしても人間の、特に女というものは口のわりには弱いものだと思う。口はいっちょまえに次々と言葉を放つのに、少し脅すと縮こまり何も出来無くなって格段に弱くなる。

だから人間はバンパイアにとってはただの餌なのだ。弱く脆いその体は、いくら抵抗してもバンパイアには敵わず、下級の…あんな出来損ないのバンパイアにまで簡単に喰われてしまうんだ。

（でもま、コイツの血は他にはない旨さがあるからな。それだけは認めてやるよ）

エリクソンはナタリーを卑下た瞳で見た。冷たい、ただの餌としか見ていない氷のような瞳。人間とバンパイアがわかりあうことのない大きな壁。

「……もうわかったろ？俺の話は終わり」

そう言っ てエリクソンはキッチンを出て行っ た。

(……あんまり教えてもらっ てないんですけど……)

少しは互いを理解し合おうかとも思っ たが、あっ ちがあんな態度じゃわかりあえるはずもない。

(なんで私エリクのこと知ろうと思っ たんだろ。馬鹿みたい)

ナタリーはスクツと立ち上がると調理途中だっ た料理を再開し た。

## ドタバタなバンパイアたち

「やあ〜！！ナタリー！僕だよ！ツバイだよ！遊びにきたよあ〜」

バンツ！とドアがはじける音がして、勢いよくツバイが現れた。  
あたしの家にはいろんな人が集まります。

そしてちょうどテーブルを磨いていたナタリーに思い切り抱き着く。

不意をつかれたナタリーは受け止めきれぬわけもなく、二人まとめてドタン！と大きな音をたてて床に崩れ落ちた。

「いだあつ！！？」

倒れた勢いで床に背中を打ち付け……………

と、

思いきや。

背中に痛みはなく、床に打ち付けたという衝撃もなく、おや？と思っていると、ツバイが片腕で倒れかけの自分を支えてくれていることに気づいた。そのためナタリーの身体は床から10センチくらい離れた距離に浮いた状態で止まっている。

「ふ〜」。間に合った。ごめんね？驚かせて。頭とかうつてないよね？」

う…。

綺麗でかわいいお顔が至近距離。

しかも心配そうにウルウルした赤い瞳で私を見て…。

かわいすぎです！

と、ぽーっと見つめていたら目の前のツバイ君が一瞬ニヤリと笑

った気がして。

視界からツバイ君の顔が消えたかと思うと、次の瞬間、首筋にざらりとした感触がした。

「うひゃあ！……つむぐぐ！！？」

ぞくりとして悲鳴をあげた瞬間、てのひらで口をふさがれた。

「しゝつ、今はエリクソンいないんでしょう？だからさ、ちょっとだけでいいんだあ。君の血、味見させてくれない？」

え！？

血い！？

目の前のツバイ君はにこりと爽やかに微笑んで見せた。赤い瞳が細められて、これまたかわいい……。――。

けど！！

待って！

この人いま何て言ったの！？

ツバイ君の顔にみとれて呆けた頭が一気に目を覚ます。

血！？血って言ったよね！？

そうでした！この人、綺麗でかわいい顔してる人だけども！

でも！

れっきとしたバンパイアでッ！エリクの仲間で！

ていうか、どうしてあたしは一度しか会った時ない人に抱き着かれた上に、首筋をし、舌（舌だね？）、で舐められたあげく、ぽーっとみとれちゃってるのよ！しかも押し倒されてる――！

信じらんない！

やっと我にかえったナタリーは口をふさいでいるツバイの手をはずそうともがいた。

が、びくともしない。

な、なんでえ！？

わたわたと全身でもがいてみるが、全くもってツバイには通用していないようだった。

「んんんんん！！！！（はなしてー！！）」

瞳だけツバイに向け、なんとか抵抗を試みようともがくが、ツバイはにこにここと笑ってるだけ。

こ、コイツ…。

「そんなに暴れないでよ。大丈夫。痛くないし、注射でちくつとされる程度だしね。血も味見ていどだから安心してよ。」

味見い！？

嘘だ。絶対嘘だあ！そんなこと言って、バンパイアってのは要求した血液以上に血を飲んでくくせに！（エリクで嫌ってくらい分かってるんだから！あたしが何回貧血おこしてると思ってるのよ…）

涙目でやめたと訴えるがツバイは聞く耳なし。赤い瞳が怪しく光り、本気モードになっている。

うう…

父様、母様、あたし、この頃変なのに付き纏われてばかりです。あたし、何か悪いことしましたか…？

死を覚悟したかのように、ぶつぶつと祈りを捧げはじめたナタリ。



（死を覚悟するほどのことかなあゝ…。ま、いつか。ちょっとだけ味見 味見）

ツバイはぶつぶつ言いはじめたナタリーをよそに、白い牙をその白い首筋に突き立てようとした。

…が。

「…テメエ…なにやってんだ」

ドスの聞いた低い声。

さあゝ…っとツバイから血の気がひいていく。  
背後からは、見なくても分かる、暗く冷たい…妖気（？）が……。

聞き慣れた声に祈っていたナタリーは目を開けた。

んん？エリク？

帰ってきたんだ。帰ってこなくてもいいけど……。嬉しくないし…。

「…俺の食糧になにやってんだよ。減るだろ」

…ほら。人のこと食糧あつかい。…いいけど。最初からそうだし。

ツバイは慌ててナタリーの上から飛び降りる。そして必死に弁解しはじめた。

「なに言ってるんのエリクソン。僕、別にナタリーちゃんの血い吸おうだなんて思ってるないよ？勘違いだよ。勘違い。ほらっ…、その…、なんていうか？エリクソンがいない間、ナタリーちゃん一人で淋しいかと思ってえ。遊びにきただけ。ほら、さっきのは…遊び遊び！ごっこ遊び！」

見え透いた嘘を…。ツバイ君、嘘つくの下手だね。それにさっきのがごっこ遊びって…。無理があるじゃん。  
あたし、少しは怖かったのよ？血、吸われるんだと思って。

「…そうかよ」

は？なに？

納得したの？今。

エリク…え、本当に？

「ふう…助かったあ」

ツバイが胸を撫で下ろしている。

…んん…？いいんだ？血、吸われてなければ許すってこと？

ふーん…。そう…

あたしは基本的に食糧でしかないのね。

動物界でいう、ハイエナ（ツバイ）に獲物あたしをとられなければいいって考えなのね。あなたは。なんか…、あたし（人間）ってバンパイヤに馬鹿にされっぱなしなのね。情けなくなってくる。というか悲しい。

「あ、エリク、そういえばどこに行ってたの？朝早くからいなかったけど」

「あゝ？俺がどこ行こうと勝手だろ？テメエにや関係ねーよ」

む。

エラソーに。

「なにその言い方…。あたしがエリクを居候させてあげてるのにそういう言い方ってないと思うんだけど」

立ち上がり、腰に手を添えて言ってみるが、いかんせんエリクの方がはるかに身長が高かったので全く迫力にかけてしまう。

見上げたエリクの顔は、苛立ちに顔が歪み、長身なのと、怒るといかつくなるといふ最悪の要素が拍車をかけて、端正な顔立ちは今や鬼の形相である。

「人間のちびのくせに。なんか言ったかよ？」

ああん？と睨みつけてくるエリクはまさに取り立て屋のごとし。でも本職はバンパイアなんだって。黙ってればいい男なのに。なーんて本人には言わないけれど…。

あたしは負けたくなくて、片足を一步まえに踏み出すと、ふんっ！と胸をつきだして言った。

「言っただわ。あなたを居候させてるのはこのあたしです！」

ツーンと唇をとがらせて睨みを効かせると、エリクの高慢+取り立て屋のごとし眼光が降り注いできて、二人の間に火花が散った。

「お前：この前あんだけ脅したのに、俺に口答えとは：学習能力のねー女だな」

「何よ！あの時は確かに怖かったわよ！血、吸われると思ってびびったわよ！でもここで怯えてあなたに負けるのは嫌なのよ！確かに人間はあなたたちバンパイアから見たら、ウジムシ：うっん！ミジンコ以下くらいなんでしょう！？でもね、あたしにだってプライドがあんの。バンパイアにただペコペコ頭さげて、血、吸われて生きてく人生なんて堪ったもんじゃないわ」

はぁ、言った。

言いたいこと言ってやったわ。

あたしはね、家畜みたいにエリクに飼われるようなことはまっぴらごめんなんだから。

言いたいを言った私はぶいっとそっぽを向くと、エリクもツバイも何も言わなくなった。

なにこの沈黙。

早く言い返してきなさいよエリク。

沈黙されるなんて思ってたんだけど。

なんか：場の空気もいやーな感じだし：あたし、退散してもいいの？悪いの？

ああ：、今の勢いで自室に籠ればよかった。どうして立ち止まってしまったの？あたし。ちよつと後悔。

かつかしていた頭が、だんだん冷えてくる。

思ったこと言ったあたしだけど：、バンパイア二人相手にこの発

言、まずかったかしら……。

これであたし二人にブチ切られたら本当に殺されるんじゃない？  
今度はそんな不安が頭をよぎる。

ちらつと二人を盗みみようとしたりした時、視界が真っ暗になった。

背中が何かにしめつけられている感覚もする。

この感じは……。

抱き着かれてる……？

「あああ〜！ かわいそうに。ナタリーちゃんはバンパイアがそんなに嫌になるくらいエリクソンにいじめられてるんだね！ きつと盟約だ、なんだとか言われて吸血を無理強いされてるんでしょう？ だから嫌なんでしょう？ でもエリクソンは嫌いになっても僕は嫌いにならないで？ バンパイアでも、僕はナタリーちゃんみたいな子、好きだから。ね？」

「えー！？ あ、……はい……、ありがとうございます……。」

まだ会ってから二回目のツバイ君に好きとか言われてもピンとこないし、言ってることが本当かどうかも疑わしいけど、エリクよりは好感のもちやすいバンパイアよね。

性格かわいいし。

どうしてエリクと先に出会ってしまったのかしら。神様の悪戯。

「ね、僕だったら君を貧血で倒れさせたりしないよ？ だから……ね？ ちょっとだけ血を……ぐはあっ！ ！？」

突っ立ってたエリクがボソツとつぶやいたツバイに蹴りをいれた。

はあ……前言撤回。

あたしはこんなバンパイアに囲まれて、一体どうなってしまふの

でしょうか。

## 結ばれた盟約

あたし、ナタリー。

ナタリー・ライアード。ここ、ガルバの国のはずれの小さな村に一人で暮らしています。

両親は二年前に不慮の事故で亡くなり、兄弟のいなかった私は嫌でも一人に。

初めは両親の死が受け入れられず、泣いてばかりの毎日。そんな私を励まし、いつもそばにいてくれたのは親友のカトレアです。

カトレアはだいの仲良しで、一人ぼっちの私のところへよく遊びにきてくれる良い子です。

でも面食いなのがたまに傷…。

カトレアに限らず、村の人たちは皆私に親切にしてくれる人ばかり。

そんな優しく、楽しい村の人たちに助けられながら、私はここで生きています。

そんな細々と、でも幸せな生活をしていた私に最悪な事態がふりかかったのです。

私、実は、今は一人暮らしじゃありません。

あることがきっかけで、人間じゃない人と同棲することになったやいました。

しかも男です。

結婚したとかそんなんじゃないやありません。

そんな幸せなものでは決してありません。

だってその人

バンパイアですから

ナタリーは羊皮紙に筆をはしらせ、日記を書いていた。

「なので…いつか魔物にとりつかれた私を助けてくれる人があらわれますよ・う・に……っと。でき……」おいっ、ナタ！、腹減った。血！……」

げ…。

おいでなすった。

この口の非常に悪い、長身の男が、バンパイアです。

髪は黒。服も黒。性格はドス黒い。絶対。だって高慢で自分勝手に、人間を馬鹿にしてて。

全身真っ黒おばけのバンパイア。

唯一黒くないのは瞳。血みたいに真っ赤な瞳で、お腹がすくとあたしをギラギラした瞳で見てるんの。飢えた獣みたい。

ちょ…、こ、怖いんだけど…。

エリクは、（あ、名前はエリクソンって言うの）つかつか歩み寄ってくる、椅子に座っていたあたしの肩を強引に掴んで引っ張った。



ガタンと音をたてて木製の椅子が倒れる。

エリクは、無理矢理立たされてふらつくあたしを強引に抱き寄せると、首筋に顔を埋めてきた。

ハア…とエリクの生暖かい吐息が首にかかる。

ぞくっ…

背筋がビリッとする。

…悪寒です。

感じてるんじゃないません。

「……っ……」

不意にザラツとした感覚があたしを襲う。

いやゝゝッ！！

舐めた！この人舐めやがったゝ！！！！

「ちよっ…！？早く終わらせてよっ」

あたしの顔、間違いなく真っ赤だと思う。

怒ってるのと、いやらしい、恥ずかしい行為をされたのと、ダブルで。

「だったら大人しくしてろ。動くんじゃねえ」

真っ赤な瞳が見つめてくる。あたしはそれだけで動けなくなった。だって真っ赤な瞳がいつもにも増して妖艶な輝きを放っていたから。どんな宝石よりも、ルビーなんかよりも綺麗な瞳だったから。

あたしは固まる。

そしてエリクは再び顔を埋めると、あたしの首にブツリ…と白い牙を突き立てた。

「…あつ…」

ブツツ…とあたしの皮膚を破って異物が突き立てられ、あたしはビクリと体を震わせた。

防衛本能で、体がエリクから逃げようと動いた。

けど、エリクがそれをさせてくれない。

背中と腰にまわされた彼の腕ががちりとあたしの体を押さえて離さないから。耳元では、ゴクリ…ゴクリ…と喉を鳴らす音。

そう。

エリクは今、あたしの血液を美味しく飲んでいるの。

なんでって？

そういう約束をしてしまったから。

化け物に襲われたあたしのを助ける代わりに、あたしの血を一生エリクに捧げるって約束をしてしまったから。

バンパイアから見て、あたしの血液は極上、とっても美味しいらしい。

味なんて人間のあたしには分からないけど。

たまたま美味しかったから、こうして吸血されてるわけです。

あたしとエリクはそういう関係。

それ以上でもそれ以下でもない。

血を分け与える者と、それを糧に生きる補食者。

これが一生。

あたしが死ぬまで続けられる。

皆さん、軽い口約束には気をつけて。

後々後悔するかもしれませんよ？

あ…。

少しぼーっとしてきた。血、なくなってきたみたい。

あたしはエリクの胸を軽く叩く。

「ね…、そろそろ終わり。あたし死んじやう」

そう言つとエリクの上下していた喉がピタリと止まる。

すっ…と皮膚を破つていた牙が引き抜かれ、エリクは頭をあげた。赤い瞳は、さっきよりもより濃く、赤黒いものになっていた。

少し視線を落とすと、エリクの口の端から、たった今まで囓つていた血液がたらりとこぼれていた。

これが生き血を囓るバンパイアの本性。

…なんてグロテスクなの…

背筋がぞくつとする。だけど、その光景についつい魅入つてしまふ。怖い。恐怖すら感じるのに。一枚の絵画のように美しいと思つてしまうのはなぜ……？

エリクは口の端からこぼれた血液を舐めあげると、最後に袖で口元を拭つた。

そして、首筋をおさえ、ぽーっと立つてるあたしを見た。

「おまえ……」

何…？

まだ血が足りないとか言うんじや…

「…俺に惚れた？」

ぶっ…！！！！？

「な、ななな、何言つて………！？」

「じゃあ動揺すんなよ」

エリクはさもおかしそうに笑ってる。

うう… からかわれた。バンパイアに。あたしは血の量が減ったせいか、反発する気力もなく、ベッドのわきまでヨロヨロ歩いていく。

「？寝んのかよ」

「うん。夜も遅いし」

ばふつとふかふかのベッドに横になる。布団もかけずに目を閉じた。

こうして目を閉じると神経が耳に集中する。

遠くからホーホーとふくろうつの声。

虫の鳴く声もする。

賑やかだわ。

夜って案外静かじゃないのかもしれない。

だって夜、行動する動物たちもいるのだから。当然といえば当然。

あ…

あたしは思いだしたように目をり開いた。そして首だけ横に向ける。視界に入ってくるのは、全身黒づくめのエリク。

彼は壁に背をついて立っていた。レディーの部屋にまだいる気…

…？

あたしは、寝るから部屋を出て欲しいと言おうとした。

でもやめた。

なんだか様子が変わったから。

エリクがある何かを睨みつけている。

あたしはそつと視線をたどった。

そこには月が差し込む部屋の窓。夜空には無数の星がまたたいている。

何を睨みつける必要があるのかしら。あたしは訳もわからず、ただだけーっとそこを見つめた。

ザッ…

「…！」

カーテンがあきつぱなしの窓を、黒い何かが横切った気がした。な、何？今の。きのせいよね……………  
鳥の影かもしれないし…  
気にしないようにしよう。

そう思ったけど、エリクが何かを警戒するように窓の外をずっと見てる。それがあたしに言いようのない不安を起こさせる。

「…エリク…、いま何か通った…………？」

あたしは堪らずエリクに尋ねた。

エリクはちらつと私に視線を合わせ、すぐに戻すと言った。

「…………ああ。なんか通ったな。気配がする」

エリクはツカツカと窓に近づいていく。

そして窓から１メートルくらいの所までくると立ち止まった。

「おい。てめえ。それで姿隠してるつもりか？壁に張り付いてんのバレバレなんだよっ」

エリクは窓に向かって一喝した。

あたしは起き上がり、布団をたぐりよせて震えた。

…また？

またあの黒いお化けがあたしの家に…???

エリクがいるとはいえ、またあの化け物に会うのかと思うと、冷や汗がふきでてる。

嫌だ。

みたくもないのに。

と……。

ついにそれが姿を現した。

黒い物体が窓枠のはじから頭をのぞかせる。

そこには目玉らしき赤い光が二つ。

「ひっ……！」

あたしは布団を思いつきりかぶり叫んだ。

「やだやだやだやだ！！エリク、早くやつつけてっ！！！！！」

あたしはきゃーきゃー泣き叫ぶ。早くいなくなって……！

化け物なんて嫌い！あたしを殺そうとやってくるから。

早くいなくなって！

「……………おや……？私は何故にお嬢さんに怖がられているのでしょうか。」

ねえ？黒坊ちゃん」

「てめえ…その呼び方がいい加減やめろ！！」

あたしが恐怖にうちひしがれているとエリックじゃない男性の声を聞いた。

「黒坊ちゃん、私にはいつまでもあなたは坊ちゃんですよ。今更呼び方変えられると思います？」

「だーからっ！坊ちゃんはやめろってんだ！クソじじい！」

しかもエリックと会話してる…？

これはどういうこと……………？

恐る恐る布団を持ち上げ、窓の方を見た。そこには化け物じゃない、エリックよりは年上の大人な男性が窓から部屋をのぞきこんでいた。

……………ていうかここ2階ですよ……………！！？

「おや！可愛いお嬢さんだ。すみませんが、中にいれて貰えます？」

少し垂れ目な赤い瞳が緩やかな弧を描く。

白髪で、長い髪を一つに結わえている男の人だった。

化け物じゃない…（？）あたしは予想していたものと全く異なっていた展開だけに、ぽかんとした。

どちら様ですか…？

あたしが何か言う前に、その男の人は勝手に窓を開けて中に入ってきた。

黒のタキシードを着たその男の人は、スラリと長い足をきちつと揃えると、被っていたシルクハットをはずし、丁寧にお辞儀をした。

「お嬢さん、こんな夜更けに大変申し訳ありません。うちの関係者がお世話になっているようで、ご挨拶をしに参りました」

「は……はあ……」

あまりにも丁寧口調、そぶりをする男性に、あたしはただ見とれた。

なんて紳士な人なんだろう？ 関係者ってエリクのことよね……？ この人も瞳が赤いし、きっとバンパイアなんだわ。

「柄にもないことしやがって……じじいめ」

さっきからエリクは眉間にシワを寄せて、ぶつくさ言っている。じじい……って……この人充分若いわよ？ まだ30代くらいじゃない。

「エリクソン。あなたはそんなに私が嫌いなんですか？ 仕方ない子だ。だからいつまでも黒坊ちゃんなんですっ」

男の人は、腰に手を当てて、エリクソンを叱責する。けど、垂れ目なせいかあんまり怒ってるようには見えない。たいして怒ってないんだと思う。

「だから……俺は坊ちゃんじゃねー……ガキじゃねーんだ」

エリクは不満そうに、大声で怒鳴った。耳がキーンとする。

「エリクソン。お静かに。それに恩師に向かってその態度はなんで



すか」

恩師……？

エリクの？

へー……エリクも教育機関にお世話になってたことがあるんだあ。普段、不良みたいだから、意外だね。  
……って、そうじゃなくて……。

「あのう……あなたはどちら様ですか……？エリクの先生っていうのは一体……」

恐る恐る聞いてみる。

すると男の人はにっこり笑って自己紹介をしはじめた。

「申し遅れました。私、ハプロ・カマルと申します。エリクソンには、魔法と退魔方法を教えていまして。あつ、退魔と言いましても、魔物と戦う力を身につける方法という意味でして、決して聖職者がやってるものとは意味が異なりますのでご注意ください」

「は……はあ……。あのう……ハプロさん……？今日はどういったご用件で？」

「今日は、エリクソンに用がありました。なに、少し重要な話がありましたね。少しエリクソンをお借りしてもよろしいですか？」

ハプロさんは、バンパイアどうし重要な話があるのだと言う。あたしは二人を邪魔する理由もないし、どうぞ、と頷いた。ついでに一階のリビングで話した方がここよりはいいだろうと思い、彼に提案した。

ハプロさんはそれは有り難いと、あたしに一礼すると、エリクに

目で合図して部屋を出ていった。エリクは渋い顔をしてハブロさんのあとをついていく。

嫌そうな顔……。これからお説教される子供みたい。

あたしは二人がいなくなった部屋の扉を静かに閉めて、ベッドに潜り込んだ。

やっと寝れるうー……。

さあ眠ろっ、と目を閉じた。

でも……

寝れない。

お客さんがいるのに、この家の主人が寝てしまってどうするのだ。例えばバンパイアと言っても客は客。それにハブロさんはいい人そうだったからお茶くらいだそうかな。

ナタリーはぴょんとベッドから跳ね起き、一階のリビングに向かった。

「これは良いソファですね。ゆったりしていて非常に良い」

リビングに置かれたラブソファに腰かけながら、機嫌良くハプロが言った。向かいがわに座ったエリクは、そんなことどうでもいいと言った様子で、早く用件を言えと催促している。

片足はすでに貧乏ゆすりをはじめ、苛立たしげだ。

「あなたはせっかち&自己中、高慢：昔からそうでしたが、今もですか」

ハプロはそんなエリクを残念に思っ<sup>うん</sup>てか、頭を垂れて呆れた。

「うるせえよ。早く用件言え」

「……はいはい。仕方ない子だ」

「だからガキ扱いすんな！」

「わかりましたから。ではエリクソン、本題です。あなたは人間界で下級バンパイアをだいぶ倒してまわってくれているようですが：なぜこのような場所に居座っているのです。早く人間界にはい出た下級バンパイアを倒して、魔界に戻ってくる約束でしょう？あなたならすぐ出来ると思って、バンパイアの中でも有能なアルカイブ一族のあなたに頼みましたのに。シルビアも淋しがってますよ？お可哀相に。婚約者のあなたが、人間界の、しかも女性宅でお世話になっ<sup>て</sup>ていると知<sup>ら</sup>ったら：彼女、泣きますよ：？」

「泣かねーだろ、あの女は。そもそも俺らは表面上での付き合いだけだし。あいつもそう思っ<sup>て</sup>るだろ」

「しかしねえ……」

エリクソンは興味なさそうに欠伸をした。

「……ともかく、あなたをここにおいてくれてる人間の彼女にも迷惑がかかります。こちらにいる間は私が面倒みますから、今日でこの家を出ましよう。いいですね？」

階段を軋ませ降りる。内容は分からないけど、二人とも何か話をしてるみたい。

ここであたしが行くのはお邪魔かしら……？

二人の会話に参加するわけじゃないしいつか。

ギシと音をたてる階段を一段一段おりて、リビングまできた。すると、ハプロさんの声が聞こえてきた。

「……ともかくあなたをここにおいてくれてる人間の彼女にも迷惑がかかります。こちらにいる間は私が面倒みますから、今日でこの家を出ましよう。いいですね？」

……え……？

今、なんて……？

あたしの体が急停止する。

今日でこの家をでる？ ……………エリクが？

嘘……………。

咄嗟に戸棚のかげに身を隠した。

ショックだった…。

信じられない。

……………本当に？

ショックで動けず、立ちすくんでると、エリクがあたしの気配を察知してこっちを見た。ハプロさんもそれにつられてあたしを見る。ハプロさんは申し訳なさそうに、重たい腰をあげて歩み寄ってきた。

「お嬢さん、…ええと…？」

「……あつ、ナタリーです」

ハプロさんの声にハツとして名前を名乗った。

「ナタリー。エリクソンがあなたとどこまでの関係になったのかは分かりません。しかし、エリクソンは事情がありまして、今日でここを出ることになりましたから。もし男女としての関係があつたのなら、あなたにとってはエリクソンとの別れは悲しいものだと思います。ですが、どうかご理解下さい。急な訪問と急な別れを許して下さいね…」

ハプロさんはそう言うとおあたしの両手をそつと握りしめた。

ひんやりした手の平だった。

エリクは何にも言わない。

あたしは俯いたままで、二人からはその表情は全く見えない。

あたしはドキドキしていた。

だってエリクが…。

こんな急にいなくなるのよ？

高慢で自己中なバンパイアが、あたしに血を一生捧げると約束さ

せたバンパイアが……？

これはもう……。

ああ…ダメ…

なんとか我慢して表情を隠そうとしていたけど、あたし、もう耐えられそうにないわ

「肩が震えています……。悲しいですね。すみません。エリクソンが急に転がりこんだばかりに」

ハプロさんが何か言ってる。  
でもそんなの聞こえない。

だって……だって……もう……

「いやったあゝゝゝ！！！！！！ あたし、エリクから解放されるのねゝゝ！！！！ ハプロさんっ、ありがとう！！ ありがとう！！ どうぞ、エリクを連れてって下さい！！ハアゝ良かったあゝゝ。 やつとあたしに平和が戻ってくるのねゝゝ！ 神様、ありがとう！！」

人生最大の笑顔で、あたしは泣きながら喜んだ。ハプロさんに握られていた手を握りかえして、ブンブンと上下に振った。ハプロさんは大人しかったあたし豹変ぶりに驚いて、目が点になってる。

「やったやった！じゃっ、元気でねエリク！ 短い間だったけど、まあ、ちょこつとは楽しかったわよ？ ミジンコくらいだけど」

あたしはハプロさんの手を掴み、ぴよんぴよん跳ねながらエリクに別れの挨拶。

エリクは、物凄い形相で額に青すじをたてている。

「てめえゝ……………、調子こきやがって。約束、忘れたとは言わせねえぞ……………」

「約束？なんのことかしら。知らないわ」

あたしは歡喜に冷静さを忘れて、エリクに向かって子供っぽくあつかんべーをした。

「約束とは？二人とも、何か契約でも交わしたのですか？」

あたし達の言ってることが分からず、ハプロさんは尋ねてくるけ



ど、エリクがいなくなる今は、あの約束も無しなものね。

「いいえ。何も？さ、エリクを連れて行って下さい。あ！玄関はあ  
つちなんで」

「こんの、クソ女ツ！！ふざけんな！！下級バンパイアから守って  
やるかわり、血を一生ぶん俺に捧げる約束はどうしたあ！！」

「なにそれ。妄想？」

その言葉にエリクがさらに怒った。

ハブロさんがいるから今のあたしは無敵だもんね  
あたしは本当に調子にのっていた。

「二人とも！！お・静・か・に！！！！」

ハブロさんの声が高らかに響き、あたしとエリクは一斉に口をつ  
ぐみ、ハブロさんに注目した。

ゴホンとハブロさんが咳ばらいする。

「二人とも……少々落ち着きなさい。今のお話、本当なんですか？」

「本当だ！」

あたしが何か言う前に、エリクが即答した。

「お嬢さん、エリクソンはこう言っていますが、本当ですか？」

「う……………はい」

あたしは正直に答えた。ハプロさんの赤い瞳が…正直に言わないと殺す、と言ってるみたいだから…。

「どういいうきさつかは知りません。エリクソンに聞きます。それは口約束？それとも正式な術式によるものですか？」

口約束と正式な術式のもの……？

何かひっかかったあたしは、即座に答えた。

「口約束でした」

「…ふむ。エリク？」

「その女の言うとおりだ」

エリクも正直に答える。そしてふいっとそっぽを向いてしまった。

「ハプロさん、あたし、そういう約束をしちゃったからエリクを家においていたんです。…でも…正直辛くて。取り消したいんですけどエリクに盟約だ、約束を破ったら殺すって脅されてて…」

あたしはこの際だからエリクと出会ったきっかけと、今までの経緯を全て話すことにした。

全て話し終わると、ハプロさんはエリクをちらつと盗み見て、あたしに言った。

「そうでしたか……。なにゆえエリクソンがこちらに滞在しているのがよく分かりました。けれどナタリー。その約束はきちんとした盟約ではありませんから、守らなくとも良いのですよ？」

「…っ！……じじい」

エリクソンが言うなとハプロさんを睨みつける。でもハプロさんはそれを無視して続けた。

「どういうことですか……？」

「正式な盟約は術式を使って相手を縛り付けるのです。しかし、あなたの方のお話しによると、本当にただの口約束。つまりエリクソンがあなたを脅していただけとなります。全く…何をやっているんですか。エリクソンは」

ハプロさんは盛大に溜息をつく。

え……？

ただの口約束？

最初から盟約は成立してなかったあ……！？

じゃ…じゃああたし、今まで騙されて脅されてただけ……？  
信じられない…

貧血になっただけじゃない。

「お嬢さん、とにかく契約…いえ、盟約を交わしていないのならば、エリクソンは私が連れていきますから。ご安心下さい」

ハプロさんがにつこり微笑む。

そうだ。盟約なんてなかったんだから、本当にエリクとはお別れなんだわ。

ホッ

「……っ……！今、ホッとしゃがったなてめえ」

ところでさつきから怒ってるエリクは何なのかしら。人を騙しといて。怒りたいのはあたしなんだけど……………（？）

「なにまだ怒ってるんですか、エリクソン、行きますよ？ではナタリー。お元気で。下級のバンパイアはまだ全滅したわけではないので、お気をつけて」

うう……………。

そうでした。

あいつら…いなくなったわけじゃないんだわ。

口約束とはいえ、今までエリクソンがいたからあたし、今ここにいるんだろうけど……………。

ハプロさんがそんなこと言うから、急に不安になるじゃない。

これからエリクに吸血されなくなるのは安心。でも、貧血にならない保証はできても、今度は命の保証がゼロってわけで……………。

「はい。生き延びられるよう頑張ります…」

でも、大丈夫よきつと。今まで一人でやってきたんだし…

それにツバイ君やエリクソンが、下級バンパイアをやっつけてくれるんでしょう？

だったら安心よ。

心配ないわ！

「エリクソン？何をぼうつと立ってるんです？行きますよ？それとも名残惜しいんですか？彼女の血が。確かに、お嬢さんからは私達を惑わす芳しい香りがしてきますからね」

ハプロさんがあたしにその綺麗な顔を近づけて、くんくんと匂い



食料でホツとしたわ。

……。全然良くないけど!?

「ちょっとエリク!あたしは…「今きめた!」」

……?何を??

「正式に術式で盟約を結ぶ。わりいが…てめえの血液は極上だ。俺がみすみす手放すと思うか……?クククク…」

不敵な笑みを浮かべるエリク。

ちよ…!ククク…って。そんな陰った顔で笑わないでよ。怖いわよ。

ていうかちよつと待って……?

今…術式で正式に盟約を結ぶって言った!?

何言ってるのよ?あたし、解放されたんだからね。

そんなの無理なんだから。

あたしは慌ててハプロさんの後ろに隠れようとしたが遅し。

首ねっこを掴まれてまんまと捕獲されてしまった。

「首だせ。こら」

きゃー!!

脱がすな馬鹿ー!肩が出る!肌がでるー!!お嫁にいけなくなる

――!!

「エリクソン、本気ですか!?あなたにはシルビアがいますのに」

シルビア?

誰それ？

それより、このド変態バンパイアからあたしを助けて下さい！

「シルビアなんか知ったことか。それより俺はいい食料が見つかってこつちのが大事なんだよ」

「しかし！術式で盟約を結ぶとは、所有の印をつけるということなんですよ！？それはつまり…あゝもう！！シルビアが怒ります！いからそれだけはおやめなさい！」

それはつまりなんですか！？その先が気になります！！それに所有ってどういうこと！？

あたしはエリクの家畜になれってことですか！？

ハプロさんは切羽つまつた様子でエリクソンを叱りつけるが、エリクソンはあたしと“盟約”（契約…？）を交わそうと必死にあたしを掴んではなさない。

「やだやだやだ！！絶対やだ！！なんでエリクの“もの”にならなきゃならないのよ～～！！」

「いいから言うこと聞け！！そもそもハナっから俺の食料になる約束だろうが！諦めろ！！」

「いやだー！！あたしはエリクの家畜にはなりたくないー！！」

手を振り、足を振り、必死の抵抗をみせても、エリクソンにはかなわず。ハプロさんも引きはがそうとエリクソンに掴みかかるが、それもエリクソンに振りほどかれ…。まあ…二人相手に、器用なこと。

と、思った隙に、エリクは何やら呪文のようなものを呟くと、同

時に掌に現れた小さな紋様を、あたしの首筋に押し付けた。

「！……っう……」

途端に首筋に激痛が走る。あたしは苦痛に顔を歪めた。

ドクドクと脈うつのに合わせて、ズキンと刺すような痛みが襲ってくる。

ようやく痛みが引いてきた頃、首筋を見ると小さな痣ができていた。それは小さな魔法陣のような形をしていて…。

なにこれ……

あたしはエリクとハプロさん、二人を交互に見た。これはなんですか？と聞くように。

「手遅れです…」

「ご愁傷様…と、ハプロさん。」

「今度こそ本当に盟約は成立した。」

と黒い笑みを浮かべるエリク。

え…

これが、もしかして………？

「お嬢さん…、エリクソンの言ったこと、聞こえました？盟約、成立です」

成…立……。



あたしの中のかなかがガラガラと音をたてて崩れ落ちていく。

盟約……成立。

あたし……エリクの家畜、決定……??

い……

い……

いやあ————!!

## お前に期待する

神様なんていない。

うん。

絶対。

だって本当にいるんだったら、バンパイアにとりつかれたあたしを見捨てるわけがないでしょう？

リビングにへなへなとへたりこむ。

盟約だか契約だか知らないけど、あたしはとうとう本当にバンパイアに捕われてしまったみたいだ。

その証拠が首筋にあるコレ……。

赤い痣っぽいマーク。小さな魔法陣みたいな模様の。

これはバンパイアがコイツを所有してますっていう所有印らしい。たった今エリクにつけられた。

エリクの所有物。

… 食料として。

……。

ショッキングすぎて立ち上がる力も出ない。

一度は約束だから、とエリクに一生血を捧げることを決めたけど…、ハプロさんが現れてそんな悲しい人生から解放されるのだと希

望の光が見えた瞬間、これだ……。

あたしを希望の光からあえなく撃沈させた元凶は、満足そうに薄暗い笑みを浮かべて笑っている。

こ……こいつ……。

人が絶望してるってのになんて奴。

あたしがへたりこみながらエリクを睨みつけていると、ハプロさんが口を割った。

「お嬢さん……、その印は一生消えません。印をつけた本人でも、二度と消すことのできない代物なのです」

二度と消えない……  
なんですと……！？

「ああ……何と言うことだ……。よりにもよって、女性であるあなたにその印をつけるとは……シルビアが怒ります……」

だから、シルビアって誰ですか……？  
さつきから疑問に思っていたけど……。

「だからシルビアはべつになんともおもわねーよ。たかだか人間の女に印をつけたくらいで」

「人間といえど女性です。あなたが愛人をつくったのだと勘違いして怒るに決まってます！」

……………。

「はあ……？ だったらシルビアを抱いてご機嫌とりゃあいいいんだろ？」

「そういう問題じゃありません!!」

…。あのう…抱くとか愛人とか、話しがついていけないんですが…。

「あのう…。…なんの話ですか…？こっちは変な印つけられてシヨックうけてるのに」

「ああ…すみません。実はエリクソンには婚約者がいまして、それがシルビアなんです。」

へえ…婚約者いるんだあ…。

ふーん…………

え！？

「シルビアという決められた女性がいながら、エリクソンは食料などと言ってわざわざナタリーに所有印までつけて…。バンパイアが所有印をつけるなんて、相当執着されてる証拠ですよあなた」

「……食料ですけどね」

あたしは一言付け加えた。

「だーかーらー…、シルビアはくそじじいと思うほど、俺なんぞに執着してねえよ」

「わかりませんよ…。たとえばバンパイアの中でも有能とうたわれるアルカイブ一族とマリー一族の政略結婚と言っても、結婚する相手が愛人をつくっていたら女性は激怒する・は・ず・ですっ!!」

力説するハプロさんにエリクは呆れて溜息をついた。

「……あんたは変な本の読みすぎなんだよ」

……はぁ……。なんかよく分からないけど、とりあえずあたしのポジションは物凄く良くないってことみたいね。

シルビアとか、エリクに婚約者がいようがいまいが、今のあたしにはどうでもいいことだわ。

この先のあたしの人生……エリクに一生血を吸われて終わりだもの。エリクがいたら、きつとあたしには恋人も出来ないし、結婚……なんて望めそうにないわね。

男と同居してる女を娶りたいなんて心のひろーい殿方なんているわけないもの。あたしだってもし男だったら、そんな女、断固拒否だし。

ああ……いろいろ終わったのね。あたし。

まだ16歳なのに。

すでに人生諦めてます。

「……あのさ……あたしはどうすればいいの……?」

身体的にも精神的にもボロボロ……。

そんな状態で質問……。

さ、なんて答えてくれるのかしら。

「今までどーり俺の食料やってろ」

ああ……聞くんじゃないかった。

「お気の毒です…」

同情…ありがとうと言すべきか、だったらもつと本気で助けて欲しかったとか怒るべきか…。どっちにせよ傷つきますから、放つといて下さい。

「……まさかエリクソンが人間にここまで執着するとは……。…さて、困りました。このことはどうシルビアに説明しましょうか…」

「ただの家畜だって言つとけはいいだろ」

……うう……最低……

エリク最低…

こんな奴に少しでもバンパイアのことを理解しようとしたあたしが馬鹿だったわ。結局その時も言い争いになつて終わっちゃったけど…。

もう知らない。

あたしはよろよると力なく立ち上がると、手摺りに掴まりながら階段をあがっていく。

早くベッドに潜って、眠って、今の状況を忘れたかった。一時でいいから。

パタン…

「……。エリクソン、とりあえずあなたを連れてここを出る話は無いです。どうせ出ていく気もないのでしょうか。私は一度魔界に戻ります。私もエリクソンにはかり構ってられませんので。ハア…仕事が増えました」

「別に頼んでねーし。でてけでてけ」

エリクソンはハプロの背中にそう吐き散らし、彼なりにハプロを見送った（？）

途端にシン…とするリビング。

誰もいないと暇になる。エリクソンはナタリーに貸してもらって自室へと向かう。

階段を登り、ナタリーの部屋を通りすぎる。

彼女の部屋からは物音ひとつしない。

寝てしまったのだろう。

ついさっきまであれだけ激しく、怒り、ショックをうけていたのだから。

「ま、明日には元に戻ってんだろ」

バンパイアの自分に唯一盾突いてきた人間なのだから。たいていの人間はバンパイアと分かると、恐怖に顔が引き攣り、奇声を発して逃げ出す。もしくは、命だけはとらないでくれと必死に頭をさげ、懇願してくる。

それしか能のない奴ら

そんな人間を見てきたからこそ、俺は人間を見下し、馬鹿にする。だが、皮肉なことにそんな情けない、くだらない奴らの血液を摂取しなければ、自分はこの身体を保てない。

正直屈辱だ。

バンパイアをやわな人間どもの血液なしでは生きられない身体にしたのは誰だ…？神か？

そんな奴がいたなら真っ先に殺してやる。

だが…、お前は少し他の人間とは違うな。俺が見てきた、やわで糞以下の人間とは違った。

人間の、しかも女という身分であるのに、お前は俺と対等であるとする。

実に滑稽だ。

笑いがとまらねえ。

初めてあった時から、俺はお前に一目置いてるんだぜ？  
血が上手いってのもあるが、他の人間とは違う威勢の良さとかな。  
ギヤーギヤーうるせーけど。

だから俺がお前に印をつけたのは、一種の興味。  
好奇心だ。

お前が俺がすること為すことにどんな反応を示すのか。  
同種の女とは違うお前に、俺を楽しませてくれる要素があると、  
うっすら期待しているんだ。



## 嗚咽

半ば強引に盟約の証を刻印づけられたナタリーは、少々鬱状態に入っていた。

朝から晩まで部屋に閉じこもり、食事もとらずにただベッドに沈みこんでいる。

とうとう本当にエリクソンの‘モノ’になってしまったということとが彼女の精神を弱めていた。

（あたしは一生エリクに血を与えるためだけに生きるのね。これじゃ、家畜同然だわ）

これまでも彼に、お前はただの食事だなんだと言われてきたが、人間として負けたくないというプライドを支えに対抗してきた。

種族自体に差がありすぎて、力の差は目にみえている。バンパイアと人間は捕食する者とされるもの。それでも盟約は互いのリスクとコストを考慮した上での同意だった。だからナタリーは、対等な立場での盟約なのだと考えていた。

だが、冷静に考えてみれば対等でも何でもなかった。血を一生彼に与える代わりに、下級バンパイアから命を守ってもらう。それが契約内容。でも、将来的に長い目で見て考えたらこちらの方が圧倒的に不利だ。

最近発生し、世間を騒がせている下級バンパイア。その存在は今現在は騒がれているが、同時にそれらを討伐する上級のバンパイアが現れた。その一人がエリクソン。今も何処かで奴らを始末しにうちこち飛び回ってると思われる。

そのおかげで契約どおり、一度襲われた時のあるナタリーは以前と変わらぬ平和な生活を過ごすことができる。

ここまではいい。

下級バンパイアが早く人間界から姿を消してくれれば世界中の人間は恐怖しなくて済むことができるのだ。

あとは用が済んだ上級のバンパイアも魔界に帰ってくればいい。  
……エリクも……

だが、それは叶わない。何故なら盟約は、ナタリーがエリクソンに‘一生’血を捧げるというものだからだ。

人間である自分には分らないが、エリクソンはナタリーの血液は極上だと言っていた。

彼の友人のツバイも、ナタリーを見て美味しそうだと言っている。そんな褒め言葉はちつともナタリーの心を暖かいものにしてはくれず、逆に彼らに喰われるという恐怖で北極の氷の如く凍りつかせるものであった。

それが余計、エリクソンを自分に執着させる要因となってしまうのだ。

目の前に美味しい餌が無防備に転がっていて喰わない人間がいるだろうか。

ナタリーは彼にとって正にそれなのだ。

もしエリクソンがナタリーを諦めるとすれば、それは彼女より美味い血液をもった人間が現れた時だろう。そうすれば彼はナタリーに飽きて、そちらに心変わりするはずである。

だが、不意ながら現在はナタリーが1番になっている。捕食される側としては心から喜べる数字ではなかった。

「……はあ……」

ナタリーは枕から顔をあげ息を吐いた。

丸一日そのことだけを考えていたが、いつまでもそうして落ち込んでいる場合じゃない。自分の意思で彼とそういう約束をしたのだ。取り消してほしいなんてもう言えない。

ナタリーは首の左側につけられた赤い刻印に軽く触れる。

初めこそつけられた痛みでズキズキ疼いていたが、一日たった今

はすっかり肌に馴染んでしまつて一切痛みを感じなくなった。  
それが余計にナタリーの心を悲しみの海に沈めてしまう。  
耐えきれず、少女の溢れる思いが透明な雫となつて頬を伝ふ。  
薄暗い部屋に小さな嗚咽が響きわたつた。

よほど耳を凝らさないと聞こえないほどの嗚咽が、部屋の外にいるエリクソンには届いていた。

彼は今、ナタリーの部屋の前にいる。壁に寄り掛かり、腕を組みながら二人を隔てる薄い扉一枚を通してそれを聞いていたのだ。

昼間はバンパイアの気配を辿り本来の役割を果たしていたのだが、力を使うとどうにも腹が空いて仕方がない。

下級バンパイアを倒すのは容易だが、ナタリーに刻印づけた時に力を大幅に使つたため、力が激減していたのだ。

そこで夜になり、家に戻ってきたところなので彼女の部屋を訪ねようとしていた所だったのである。

いつものように乱暴に扉を開け、突入しようとドアノブに手をかけたが、瞬時にそれをやめた。

扉に耳をあてると、かすかだが声を押し殺して泣く彼女の声が聞こえてきたのだ。

普段、ナタリーは泣くということはない。エリクソンが見てきた彼女は、怒るか不貞腐れた顔くらいしか見た時がない。笑つても彼女が親友のカトレアという時だけだ。普段あまり弱みを見せない

彼女の嗚咽に、エリクソンは一瞬戸惑った。

（チッ……あの女が泣いていようが知ったことか）

エリクソンは再びドアノブに手をかけた。

が……。

身体が扉を開こうとしない。

何故か動こうとしない。

身体は血液を欲しているというのに。

エリクソンは苛立ち、扉からスッと一歩下がった。

そのまま壁に寄り掛かり、静かに彼女の嗚咽が聞こえなくなるのを待つ。

（俺はなにやってんだ…）

彼女の部屋の前で立ち往生してる自分がよく分からない。

「……」

待っていたって仕方がない。どうせ彼女が出てきても前回の吸血から日も経っていないから、彼女から血液を頂くにしても足りないに決まっている。

エリクソンは馬鹿馬鹿しくなつてようやくその場から離れた。

帰ってきてからずっと空腹である。

ナタリーの血液を頂戴できないのならば、他をあたることにした。とはいえ、正体を明かし吸血しても支障のない人間を探さなくてはならない。

村の人間は自分の顔を知っている者がちらほらいる。しかもナタリーの恋人としてだ。

正体がバレて厄介なことになっては困る。村の中では自分は彼女の恋人役を演じなくてはならないのだ。

（村の人間が駄目ならどうすっかな……）

男から吸血するのは気が引けるし、女から吸血するにしてもそれなりに美味しい血液をもった人間じゃなければ食欲が失せる。

短時間でそんな人間を探すのは無理な話だった。

「……あ」

思い当たる節はないかと頭をフル回転させると、すぐに思い付いた。

「あいつがいるじゃねえか」

それなりに血液が美味で、しかも美しい女。

エリクソンは家を出ると、暗がりの中、村を囲うように生い茂る森の中へと姿を消した。

## シルビア

月下。

白い洋風の屋敷から、一人の女が顔をのぞかせる。  
彼女は手摺りに寄り掛かり、空を見上げた。

「…今宵は満月。なんて美しい…」

女はうつとりと感嘆の溜息をついた。

月は美の象徴。そして女としても例えられる。

「ああ…美しい。月はまるで無垢な乙女のように。あんなに真っ白く輝いて…。男を知らない乙女のようなわ…」

女はまた一つ、溜息をついた。

「…あんなに無垢で純真な月。穢してしまいたい。真っ赤な血の色で。真っ赤に染め上げれば、月はもっと妖艶で美しい光りを放つこと間違いないのに」

女はうふふと笑い、腰までのびる白い髪をなびかせ、中庭へと降り立った。

咲き乱れるは真っ赤な薔薇たちの間を通り抜け、女は中央の噴水へと腰掛ける。噴水の水は月光に照らされキラキラと輝きを放っていた。

女は鏡のように水面を覗き込み、そこに写る自分を見つめる。

写ったのは日の光りに晒したことがないような真っ白い肌。宝石を思わせる紫色の瞳。長く艶やかな白い髪。整った顔立ちの自分。それは誰の目から見てもこの世のものとは思えぬ幻想的な容赦。女は水面に写った自分を見て満足げに笑うと、顔を上げた。

「うふふ……美しいわ。わたくしはまるであの満月のようなね。そう、

真つ白で穢を知らない…。ああ…でも駄目。わたくしにはただ白だけの純真で無垢な美しさだけでは物足りないわ。そう、真つ赤な血の色で穢れてこそ妖艶な美しさを手にいれられる。わたくしには妖艶な美しさのほうが似合っているのよ。

…ねえ、そうでしょう……………エリクソン？」

女は噴水から顔を離すと、にこやかに尋ねた。

そこには黒髪に赤い瞳を光らせた青年、エリクソンが立っていた。

「ようこそ。わたくしのお屋敷へ。わたくしを真に美しくできるのは貴方だけですわエリクソン」

女は嬉しそうに立ち上がり彼に擦り寄る。

「酔狂なこつたな…。使用人はどうした。俺が入ってきてても誰にも会わなかったが…」

エリクソンは擦り寄る彼女を剥がすのも面倒らしく、されるがままになっている。

それを良いことに、女は彼の胸元にしなやかな指をスルリと滑り込ませると、耳元で甘く囁く。

「あら…貴方はわたくしの夫となるお方。このお屋敷の主となられるお方ですもの。誰も文句は言いませんわ。それに、貴方ほどバンパイアとしての能力に長けた方はいらっしやいませんもの。皆、貴方の気配に怖じけづいて出てこれないのですわ。情けないこと」  
くすくす笑うと女はエリクソンの首筋に強く口づけた。

「今日はどのようなご用事で？わたくしを所望されにいらっしやったのですか？」

「……………まあ似たようなもんだ。腹が減ってる。お前の血、よこせ」  
エリクソンは女を抱き寄せ、その白い首筋に喰らいついた。

「あ……っ……。性急ですこと……」

女は噛み付かれる痛みに顔を歪ませるが、恍惚とした瞳で彼を見つめた。

（ああ……わたくしエリクソンに穢されている。噛み付かれてこの白い肌から真っ赤な血を流して……）

うつとりとした表情で彼を見つめると、彼女も彼に腕をまわし抱き着いた。

エリクソンは瞳を閉じて静かに彼女の血液を貪っている。

抱き合う二人は熱烈に愛し合う恋人どうしのように見えた。

枕に顔を埋め、声を押し殺してむせび泣いた。

もうたくさん泣いた。

充分すぎるほど泣いた。もう泣かない。

ナタリーは小一時間ほど泣きつくして、やっと枕から顔をあげた。明かりもつけず、闇に沈んだ部屋。一日中閉めっぱなしだったカーテンを開けると星が瞬いている。

村を見渡すと明かりが灯っている家は一軒もない。みな就寝時間。真夜中なのだ。

ナタリーは泣きすぎて腫ればったくなった瞳が気持ち悪くて、一旦顔を洗おうと熱い湯を沸かした。



熱い湯にひたした手ぬぐいを絞り顔を拭くと、温かさが顔全体に伝わってきて沈んだ気分が浮上してくる。思い切り泣いたせいもあるって、さっきよりは心がスッキリした気がした。

（あたしったら一日中物思いに沈んじゃって馬鹿みたい。こんな姿をエリクに見られたら余計罵倒をあびせられることになるわ）

頬をぴしゃりと叩いて弱った心に喝をいれる。自分の血液をさしただけで、大好きな村のみんなが平和に暮らせる。それなら安いものじゃないか。

それに、エリクソンは自分を馬鹿にはしても、殺すことまではしない。彼を信用したわけじゃないが、それだけは自信がもてる。彼は自分の血を必要としてるのだから。

（そういえば…）

ふと、彼のことがかかってくる。今日は自室に引きこもっていたし、彼には一度も会っていない。

あちらから声をかけてくるわけもないので忘れていたが。

（仮にもあたしが泣いてる時に慰めにでもきたら、ぶん殴ってやるわ）

心の中で悪態をついてから、いそいで自分を叱りつけた。

（いけないわ。殴るだなんて狂暴なこと考えて。あたしは女の子なのよ？そんなこと考えちゃ駄目）

それにしてもエリクはどこにいるのか、会いたくはないのかだが気になって仕方ない。

（部屋かしら？）

そう思う前にナタリーの身体は自然とエリクソンの部屋へと向かっていた。

部屋の前まできて、ナタリーはぴたりと立ち止まる。何故か心臓がドキドキと高鳴っている。

（思えばエリクの部屋にくるの初めてだわ。いや家の部屋なんだけど。あいついるのかしら？もしかして寝てる？）

ドアノブに手をかけ、思い切ってほんの少し扉を開けてみる。

中は暗い。

（やっぱり寝てるのかしら？）

あと少しだけ扉を押してみる。

今度は部屋の奥まで見えるほど開けた。

この部屋の間取りはナタリーの部屋と全く一緒に、違うと言えば家具の配置が対称的になってることぐらいか。

奥のほうでちらつと窓が見えた。

（カーテンが閉まってない）

次に見えたのがベッドだった。

掛け布団は綺麗にたたまれていて、寝てると思われた本人はおらず、もぬけの殻だ。

（いない……。じゃ、どこに出かけてるのね）

いないと分かれると、ナタリーの心臓はおさまり、ホッと息をついて扉を元通りに閉めた。

もし彼が部屋の中にいてのぞき見たとなれば何を言われるか分からないし、対応に困ってしまう。

（いなくて良かった）

バンパイアとはいえ男性の部屋を訪ねるなど、大胆な行動極まりない。

（あたしったら、なにやってんの、もう。…………眠くないしお茶でも飲もう）

ナタリーは湯を沸かしにキッチンへと向かった。

空が白んで夜が明ける。大きな天蓋付きベッドの上で二つの身体がもそもぞと動く。

「……う……ん」

ごろりと寝返りを打ったエリクソンは隣に柔らかいものがあるのを感じて目を見開いた。

「あら、お目覚めですの？」

控えめに、はにかんだ笑みを見せたのは白い髪、紫の瞳をもった美女。

「シルビア……」

「あれからすぐに眠ってしまうんですもの。人間界でのお仕事、相当お疲れのようですね」

白い髪の美女、もといエリクソンの婚約者シルビアは上半身を起こして起き上がった。さらさらと長い髪がシーツの上におちる。

「なんで俺がここでお前と寝てんだよ」

訳がわからんと頭をぼりぼり掻きながらエリクソンもまた起き上がった。

「覚えてらっしゃらないの？ 貴方がわたくしを所望されたのですわ」

そう言ってまたはにかむんで顔を俯かせる。

エリクソンはそんなシルビアを白々しく思う。彼女のあからさま

な演技で昨夜の記憶がすっかり甦ってきた。

「……。馬鹿言ってるなよ。俺は腹が減ったって言ったただけだろうが。それで帰るのが面倒になったからここで寝ただけだ」

「なんだ。覚えてらしたの。つまらない」  
シルビアは口を尖らせて拗ねる。

「俺がお前と寝ると思うか？」

「思いませんわ。だってわたくし達の間にそんな不祥事が起こるほどの愛なんてものは一切ありませんから」

彼女はキツパリと否定した。

「だよなー。だって勝手に決められた結婚だぜ？お前には悪いが、俺はごめんだ」

「わたくしもですわ。貴方の……。そうですわね……。好きと呼ぶべきところがあるとすれば、吸血行為が上手いことかしら。あとは駄目ですわ。自分勝手すぎますもの。わたくしは貴方の恩師であるハプロ様をお慕いしていますの。彼はとっても紳士的で素敵な方ですわ」

シルビアは彼の姿を想像してうつとりと自分の世界に入ってしまったっている。

（俺は全否定かよ……。ていうかなんでアレが好きなんだ？シルビアもナタリーも……）

ナタリー

昨日は丸一日部屋から出てこなかった。らしくないしおらしい彼女。昨日は結局姿も声も聞いてない。唯一聞いたのは部屋から漏れ

る小さな嗚咽だけ。今ごろ彼女はどれくらいいるのだろうか。

「……。……ナタリー……」

「ナタリー？誰ですのそれは」

聞き慣れぬ名前に、シルビアは綺麗な紫の瞳をぱちくりさせている。

「え？…なんでもねえよ」

ぷいっと慌ててシルビアから顔を逸らした。

そんな彼の態度に、シルビアは歓喜の声をあげた。

「あら？あらあらあら？もしかしてその方、エリクソンの想い人ですの？」

うふふとからかうシルビアに、エリクソンは違うと大声で否定した。

「ち、違うー！」

「あらあら、そのわりに吃<sup>ども</sup>っちゃって。可愛いですこと。教えて下さいな。その方、どんな方ですの？可愛い方？それともわたくしのように美しい方？」

詰め寄るシルビアから逃れようとベッドからはい出るが、彼女が後ろから首に纏わり付いてきて離してくれない。

「おまつ…離せよ！シル！」

「嫌ですわ。せっかく貴方の初々しいお話が聞けそうなんですもの。」

話すまでこの手は離してさしあげませんわ。おほほほ」

なんとか引つpegがそうとするが、余裕たっぷり到高笑いする彼女はなかなか剥がれない。

（クソッ……。これだからバンパイアの女は。見た目と違って怪力すぎんだよ）

二人がベッドの上で纏れ合っていると、寢室の扉が控えめにノックされてシルビアのメイドが入ってきた。シルビアが幼少の頃から彼女を世話しているカマイユだった。

見た目四十代くらいの温厚な顔立ちの女性で、ふくよかな体型もさらに温厚さをかもしだしている。

「おはようございます。あらやだ、朝から未来のご夫婦揃ってじゃれあうなんて、楽しそうですわねえ。エリクソン様もシルビア様のような美しいお方が奥様になられるなんて嬉しくてウハウハでしょう?」

カマイユはあははと大口を開けて笑い、若い二人をからかう。

「……………」

（シルビア、あのババアの口を黙らせてくれ）

（カマイユは良い人よ。そんなことおっしゃらないで下さいな）

ヒソヒソとシルビアはエリクソンを叱責する。

そしてニツコリと花のような笑顔をつくると。

「カマイユ、おはよう。そうよ。わたくし、今からエリクソンとの愛を深めようと必死ですの。だから邪魔しないで下さいね。着替えなら後で致しますから、カマイユにはすみませんが、もうしばらく

してからまた来て下さいな」

シルビアが笑顔でそう言うと、カマイユはお嬢様の恋路のためならばと、彼女の演技を真に受けて嬉しそうに部屋をあとにした。

再び二人きりの空間に戻る。

「さあて…俺は人間界に戻らんと。仕事仕事…」

今がチャンスとばかりにエリクソンは腕を振りほどき自分も部屋を出て行くとした。  
が。

「お待ちなさい。エリクソン！お話は終わってませんわよ。それに久々に参られたのです。婚約者が朝食も共にせず一晩寢屋で過ごし終わりとはお行儀が悪いですわよ。女と寝るためだけにきたと思われます。せめて朝食くらいはご一緒にいきないな」

「…わかった」

こうしてエリクソンは腹を満たすために一時帰省したのだが、朝食をとるまでは人間界に帰れずじまいとなってしまうたのである。

（…ここでの朝食って堅苦しいから嫌なんだよな…。マナーがどうのこうのって…）

「さ！お食事に行きましょう？わたくしはカマイユを呼んで着替えてから参りますから。良いですね？決して勝手に帰ってはなりませんよ？貴方のためでもあるんですからね」

ここまで言われてはもう逃げることは出来なかった。

（朝食……なにでるんだか…）

ピチチと鳥の鳴く声がナタリーに朝を知らせる。夜中、リビングのソファで紅茶を飲んでいるうちにそのまま眠ってしまい朝がきたらしい。

（う…）

ソファから起き上がると、座ったまま寝ていたせいで肩や腰が悲鳴をあげている。

（うわ、痛い。だるい）

疲労を感じながら立ち上がると、怠い身体を軽くするために、腕を伸ばしたり身体を回したりした。

（掛け布もかけずに寝ちゃったから身体が冷えてる。少し寒いわ）  
ぶるっと肩を震わせると、熱い湯を浴びに浴室へと向かった。

その時ナタリーは気づいてなかった。

鍵をかけたはずの玄関の扉が微かに開いていたのを……………。



《……ギギギ……娘の……生き血を……私……に……》

その不穏なる黒い影の侵入を……。

## 危険（１）

朝食はシャンデリアのぶら下がる豪華な広間へと案内されてのものとなった。

そこではシルビアとエリクソンの二人だけ。

目の前のテーブルには、二人だけでは食べ切れないほどの量の料理が並べられる。

（うわ…アルガバの肉だ。血の味がして美味いんだよなあ）

アルガバとは魔界に生息する魔物の一種で、四つの目をもった馬のような魔物のことをいう。真っ黒な体毛で覆われていて、走ると人間界の馬の十倍もの速さで走ると言われる魔物のことである。

鉄分を豊富に含んでおり、バンパイアにとっては人間の生き血の二番目に美味であるとされているのである。

エリクソンがアルガバの肉を調理したものに目が釘付けになっていると、シルビアはくすりと微笑んだ。

「そんなにアルガバを召し上がりたいたらどうぞ。なんならお持ち帰り致しますか。人間界では食べられない代物ですから」

「いや、いい。それよりお前の親は？昨日から見かけないが」

エリクソンはキョロキョロと周りを見渡した。だが、人の気配は全くしない。

「わたくしの両親は、別邸におりますわ。二人して旅行にでかけたのです」

「ふーん…」

そうか、とエリクソンはフォークでグサツとアルガバの肉を突き刺しながら頷いた。

「そういえば人間界に行ってからアレは倒しましたの？」

アレとは人間界で大量発生中の下級バンパイアのことだ。

「まあな。毎日じゃないが、二日に一度は出てくる。弱いくせに面倒増やすなつての」

「…そうなんですの。アレは卑しい生き物ですからね。たまにわたくし達と同じ生き物として扱われますけど、あんな低俗なものと一緒にしないで欲しいですわ」

「まったくだな。お前らのためにわざわざ人間界にいかなきゃならない俺達の身にもなれつての」

エリクソンはぶつぶつと日頃の文句を言った。本人に言っても低俗なバンパイアゆえに理解出来ないからだ。

「もう少し言葉の分かるやつならいいのによ」

「それでしたら、なにも倒しに行かなくてもよくなりませんこと？」

「まあな。でもアイツら、頭悪いくせにどの人間が美味いかは分かるんだぜ？」

「きっと生き血を啜ることしか考えないからですわ。それしか能がないので、美味しい人間を嗅ぎ分けるのに長けているんですわ」

シルビアは、ああ卑しいと言い放ち食事を続けた。

（卑しい生き物ね。確かに。血が欲しい血が欲しいって五月蠅いっつの。ま、あの辺一帯は排除したから当分は出てこないだろ）

エリクソンはナタリーの住む小さな村を思い浮かべた。森に囲まれ、緑溢れる村。村人はそう多くはないが、土地が広く、牧羊をしている者が多い。そのため市場では牛や鶏よりも専らラム肉が売られているのである。

（そういえば出来損ないは、羊も喰ってたな…）

羊の血など美味いのかは分からないが、動物の生き血など、エリクソンには興味がない。

一応村の敷地内で見つけてしまったからには倒していくが、奴らに喰われた羊の死骸などを見ても食欲は一切湧かない。

（やっぱ俺は人間の血液に限る）

そう思っ、村の中にナタリー以外にも美味そうな人間はいないかと、暇な時に市場を歩いてまわったりする。

黒髪に赤い瞳。全身漆黒の洋服という目立つ格好のため、村人の注意をひきやすく、探しにいかずとも人間たちが寄ってくる。

大半は村に住む少女や女どもで、カッコイイですね、とか、遊びに行きましようと五月蠅いくらいに言い寄られる。

エリクソンはその度に適当に受け答えしつつ、人間の品定めをしたものだ。

結局は、ナタリーほど美味い血液をもった村人は一人もいなかったのだが。

思い出すだけでも堪らないくらいナタリーの血液は極上だ。

彼女の白い肌を貫き、心臓の鼓動に合わせてとろりと溢れだす赤の液体は、濃厚で芳醇なワインそのもの。

くせになる深い味わい。

次はいつ飲めることができるのか。エリクソンはそればかり考えた。

目の前に残るアルガバの肉も、彼女の血液と比べたら大したこと

はない。エリクソンには先程まで食べていたアルガバの肉料理も、味気無く感じてきた。

（そろそろ行くか）

シルビアには充分付き合った。ナタリーの血液を考えたら、欲しくてたまらなくなる。新たに湧いてきた衝動を抑え、頃合いを見計らって御暇するでしょう。

そう思い、さりげなく席を立とうと腰をあげた瞬間、ふと向かい側に着席したシルビアの目が光った。

「まだデザートがありますの。それまではわたくしのお話に付き合ってくださいな。ああ、そうでしたわ。危うく聞くのを忘れるところでした。ナタリー…とおっしゃいましたわね。その方、どんな方なんでしょう？」

シルビアは危うく面白い話を聞きそびれる所だったと、くすくすと軽やかに笑った。

「……」

どうやらシルビアはその話をするまでは帰してくれないらしい。恋愛話に花を咲かすのが好きなシルビアに、これだから女は、と心中呆れた。

その頃ナタリーは熱い湯を浴びて、疲れた身体を癒していた。さつきまで身体の節々が痛んでいたが、あつたまつた身体からはそれが嘘のように消え失せた。

バスルームの窓から朝の暖かい陽射しが差し込んでくる。新しい一日の始まりを予感させて、昨夜まで沈んでいた心がリフレッシュしてく気がする。身体を洗い流し、心に溜まった鬱憤や悲しみも洗い流されたみたいだ。ナタリーは気分爽快でバスタイムを楽しんだ。

そろそろ上がるのか、と浴槽から立ち上がるうとした時 ……

ガタンツとバスルームの外から大きな物音がして、ナタリーは固まった。

（なに…今の音）

扉が揺れるような音だ。

（…誰かいるの…）

不審な物音に動けないでいると、今度は外から女性の悲鳴まで聞こえてきた。

「きゃあー！ー！！」

断末魔の叫びとも言える凄まじい悲鳴にナタリーの心臓は早鐘を打つ。

（外で何か起こったの）

はやる心臓を抑えて耳を澄ましていると、ざわざわと村人が集まってきたらしい。遠くて聞こえづらいが、人が死んでる、早く医者をして！という言葉が聞こえてくる。

（人が死んでる？どういうこと。誰か殺されたの）

外の状況が気になる。平和な村に、暗雲が立ち込めるのを感じた。

嫌な予感がある。

さつきまで外からは爽やかな朝をつげる光が差し込んでいたのに、今は暗い。

ナタリーの不安を表すかのように、太陽が雲に隠れてしまった。  
(とにかく確かめなくちゃ！)

そう思っただけで浴室から勢いよく出ると、またガタンツと大きな音がした。

(やっぱり誰がいるんだわ。まさか…村の誰かを殺した犯人?!)  
頭を通り魔の文字が浮かび、全身に緊張がはしる。

浴室を抜け、慎重に脱衣所までくると、ガタガタと扉がひとりであらわに動いていた。

何者かが脱衣所の扉をこじ開けようとしている。

ナタリーはそう確信した。

幸い、扉は鍵がかけられていて簡単には開かない。だが、それも時間の問題だろう。

扉は今にもぶち破れそうなほどガタガタと揺れ、ガタンツと音をたてている。

(どうしよう。どうしたらいい?!)

もし扉が壊され、犯人が侵入してきたら今の自分じゃ太刀打ちできない。浴室にも、脱衣所にも、武器となるものは一つも見当たらない。

逃げようと思っても、浴室の窓は小さなすぎて通り抜けることは不可能だ。

(どうしよう。どうしよう)

今にも壊れそうな扉を目の前に、ナタリーは慌てた。

考えなければ。考えなくちゃ！

とにかく裸のままではダメだと脱衣所から服を掴みとり、浴室の扉をしめて身を潜めることにした。

素早く衣服を身につけ、なるべく音をたてないようにその場にしゃがんだ。

気配を消したらいなくなってくれるかもしれない  
今はそう願うしかなかった。

もし侵入されて見つかったら、なんとしても抵抗して逃げだそう。

ナタリーはそう決意した。



## 危険(2)

シルビアの尋問タイムは休む間もなく続いた。その間、エリクソンは黙秘権と称してだんまりを決め込んだ。

人間と同居して？

しかもそいつと恋人って設定で？

さらには極上たる血液に目が眩んで、盟約まで交わして？

終いにはそいつを逃がさないために盟約の刻印までつけて？

そんなこと……

言えるか！ボケ！！

しかし、シルビアがそれを許すはずもなく、逆にだんまりを続ければ続けるほど、彼女の中に知りたいという欲望が膨れ上がり……。意地でも吐かせようとどこから湧いたのか、メイド達に俺を取り押さえさせ、自分は上質な羽扇をもって、あるうことが俺の弱点……右脇腹に突っ込んできたから堪らない。

「ひぐっ」

変な声が出た。

シルビアは愉快そうに俺の弱点をつんつんと羽扇の先で攻めてくる。

(く……。負けるか。むず痒い……むず痒いが、こんなことで屈する俺じゃねえ)

「エリクソン。さあさ、白状なさいな。ナタリーとは誰なのですか？もちろんあなたの思い人なのでしょう？わたくしお会いしたいですわ。わたくしちょうど女のお友達が欲しかった所ですの」

シルビアは羽扇を持たない左手で口元を隠しつつクスクスと笑う。

「こ……この……お……お……そいつは………そんなんじゃあ………ねえ！  
！ぶはっ、おまー！やめっやめ、ぶははは」

「じゃあ何なんですか？わたくし気になりますわ。あなたの口から女性の名が出るなど珍しいんですもの」

（く……。この性悪女め。いくら上品な口調や仕草したって、こういう悪趣味な女だってことがハプロにバレたらどうなるか分かってんだろっな……）

ハプロは今時にしては非常に珍しい頭の古い男だ。それは考え方が古いつて意味で、別に年寄りなわけではない。

彼は廃れゆくマナーや文化を尊重する古風な考え方をするバンパイアで、例えば誰かと恋愛したいと思ったら、その相手にはまず手紙を送って挨拶し、手紙でもって会話をし、手紙でもって愛を囁いてオーケーが出たらやっと付き合うという、お前……いつの時代のバンパイア？と言いたくなるほど超超古風な奴なのだ。ちなみにいま、奴にそういう恋人はいない。

ただそういう恋愛をしたいと言っていたのは確かだが。そして奴の女のタイプは上品で奥ゆかしいく清纯な女らしい。

（どんな女だ。そんな女今の時代いるのか？と突っ込みたくもなる。だから悪趣味をもつシルビアは、どう考えたって奴のタイプ外に決まってる。まったくじじくさい……）

そういう彼の性格から、エリクソンはいつの間にか彼をじじいと呼ぶようになった。ハプロは始めこそ嫌がったが、今はもうじじいという呼び名で呼ばれることを諦めている。

エリクソンはむず痒さでひくつく身体を抑え、目でシルビアを威嚇した。それを彼女は

「あらやだエリクソン。目はわたくしを射るような強い眼差しですのに、口元は笑っていますわ。わたくしを見て、いやらしいことをご想像なさっているのね」

ポツと頬を赤らませ、  
恥ずかしそうに俯いてみせた。

しかし、右手に握られている羽扇は相変わらず俺の右脇腹を絶妙なタッチでまさぐり続けている。

（こんの…くそー！！ちげーし！！その羽扇の動きを今すぐ止めるー！！！！）

そう叫びたいのに、笑いをこらえるのに必死すぎて声すら出せない。

（こつなつたら…）

最終手段だ。

エリクソンは笑いを堪えながら大きく息を吸い込み、それを一気に吐き出した。

「あああ！！！！窓の外にハプロの奴が！！！」

「え？」

しめた。シルビアやメイド達が窓の外に気を取られた瞬間、エリクソンは身をよじらせ逃げ出した。

「きゃあ！」

エリクソンの身体を押さえていたメイド達は軽く突き飛ばされ悲鳴をあげた。

その声にふるかえるシルビア。

「あっ?! エリクソン、わたくしを騙しましたのね」

ぶくつと拗ねるシルビア。

(お前のほうが先にやってきたろ…)

「こんな古典的な罠にひっかかる方が悪い。じゃあな」

メイド達の間を摺り抜け、エリクソンはまんまとシルビアのもとから逃げおおせたのである。

「まったく。素早いことです。結局分らずじまいでしたわね」

シルビアはホウ…と溜息をついた。

「次回の逢瀬を楽しみにしていますわ」

「……やっとこっち（人間界）に来れた」

なかなか帰してくれないシルビアから逃げるように人間界に戻ってきた。エリクソンにはたったの一晚の滞在が、一週間にも二週間にも長く感じられていた。

（あいつと関わると疲れる……）

肩を回しながら、村はずれの教会から外へはい出た。

実は、ナタリーと初めて出会ったこの小さな教会を通じてエリクソンは魔界と人間界を行き来していた。

バンパイアはこの空間のどこにでも穴を開け、行き来することが出来る。

が。

エリクソンにはこの教会が建つ位置が自分の波長と合いやすく、簡単に穴をあけることができるので、ここを利用していたのだ。

ちょうど人間界にきた時にナタリーとここで出会ったのは、魔界から移動し終えたエリクソンのところに、たまたまナタリーが入ってきた、という運命の悪戯によるものだったのだ。

（よもや今に続く関係になるとは思っていなかったけどな）

すたすたと村を囲む森を抜けると、だんだん民家が見えてくる。

煙突からはもくもくと煙りが立ち上り、村人が働きはじめる時間帯なのだということを告げている。

（ふああ…今日も呑気だな。この村は）

民家から煙りが立ち上り、動物たちが目を覚まして広い柵の中で餌である草を食んでいる、のどかな景色を見ていると無性に眠くなる。

（昼寝でもするか）

適当な民家の屋根でも借りて一眠りしよう、そう思って屋根によじ登ろうとした時、人だかりが目に入った。

（なんだあれ）

人だかりは円になって、中心に何かを囲んでいるような形になっている。目を凝らして見ると村人の様子がおかしい。

何かあったのか？と思うより先にエリクソンは気づいた。

（！こいつは）

エリクソンは一気に人だかりの中へと走っていく。

「トーマスが！トーマスが何者かに殺された！」

「なんてことだ。この村で殺人が起こるなんて」

「誰よっ誰がこんなことしたのよ！！」

「こんな小さな村だ。都からも離れてる。ということは犯人は村の誰かなのか？！」

「そんなっ。恐ろしい！」

パニックに陥っている村人たちはすでに冷たくなって地面に倒れている中年男性トーマスを見下ろして口々に叫んでいる。

「サム先生、トーマスは、トーマスは本当に死んだんですか？！」

村人の一人がトーマスの脈をはかり、死を告げたサムスンに一歩あゆみでて言った。

サム、もといサムスは村で唯一診療所を営んでいる医者だ。

人が死んでいるとの報告を受け、すぐに駆け付けたのだが、トーマスの心肺はすでに停止。

全身蒼白。顔は何者かに襲われたせいか恐怖に引き攣ったままの状態だ。目はぐりと白目を向き、慌ててサムが脈を測り、心肺蘇生をして助けようとしたのだが、途中で異変に気づき、蘇生は既に無駄なことに気づく。

トーマスの身体はくまなく調べた。外傷はほとんどなく、遺体は綺麗なままの状態。なのに全身はひどく蒼白で血の気が全く感じられない。死んでいるのだから当然なのだが、まだ死んで間もないはずなのに、ここまで蒼白なのは異常だった。

（なにかがおかしい…）

サムが首を捻ったその時だった。

「ああ！トーマスが生き返った！！」

「本当だ！サム先生が助けたんだ」

わあと村人たちが歓声をあげた。

（な？！）

サムスは絶句した。なんと、たった今死んだと判断したはずのトーマスがむくむくと身体を起こし始めたのだ。

（まさか！トーマスは死んでいるはず…）

脈もない。

これっぽっちの体温すら感じなかったのだ。

（そんなはずは…）

サムスは信じられない光景に、もう一度彼の右腕を掴んだ。

脈は

やっぱりない。

（馬鹿な！脈がない。心音がかんじられん。体温も…一切だ。なのに彼は動いて…。どういうことなんだ！）

にわかに信じられぬ光景にサムスはたじろぐばかり。

「トーマス、トーマス大丈夫か？顔が真っ青だ。一体何があったこ

んな所に倒れて…………ぎゃああ!!」

中年の男が歩みでて、起きあがろうとする彼を手伝おうと手を差し出した瞬間、ガバツとトーマスが彼の腕に喰らいついたのだ。

「うわああ! やめろっ! 助けてくれええ!!」

喰らいつかれた男は真っ青になって腕を振り払おうと助けを求める。

一番そばにいたサムスはすぐさま彼の腕からトーマスを引きはがそうと力を込めた。

だが、腕にしっかりとトーマスの歯が食い込み、なかなかはがれない。

サムスは周りを見渡し叫んだ。

「誰か! みんなも手伝ってくれ!!」

慌ててサムスは周囲の人間に助けを求めた。だが、トーマスの暴走に彼の様子がおかしいことに気づいた村人たちは、加勢しようともせず、サムスを置いて散り散りに逃げ去ってしまう。

(そんな…)

ボブを助けようとするサムスン一人を置いてみんな逃げていつてしまった。

思いのほかトーマスの力は強い。今のトーマスは狂暴な獣のようだ。

とてもじゃないが一人で対処できそうにない。

だが、それでもサムスは医者として人を助けようとする使命感からか、一人とり残されても腕を噛み付かれて苦しむボブを見捨てるなんてことは出来ない。



「やめるんだトーマス、この人はボブだ！分からないのか？！」  
トーマスを説得しようと試みるも、彼にはサムスンの言葉など届いていない。白目剥き出しにしてボブの腕を噛みちぎらんとしている。もはや化け物

「うぎゃあああ」

ボブが悲鳴をあげる。のボブの腕も限界だった。ミシミシと骨が鳴っている。

肉を切り裂き、骨まで歯が達しているのだ。

もう彼の腕は使い物にはならないだろう。

（くそつ、くそ！！どうしたらいい！！）

たった一人、彼を助けたいのになにが出来ない自分にサムソンは悔しそうに唇を噛んだ。  
と。

「あーあー……。やあつぱりなあー」

サムスンの背後から若い男の気怠い声が聞こえてきた。

ハアと溜息が聞こえる。

誰かがまだ残っていてくれた。

サムスンの心に希望の光が降り注ぐ。

サムスは声の主を振り向き、すぐさま応援を頼んだ。

「君、頼む！！ボブから彼を引きはがすのを手伝ってくれ！！！」

切羽詰まった声で懇願した。

（一人じゃ駄目だが、二人いれば止められる）  
そう思った。

「ああ、いいぜ？」

若い男 エリクソンはゆっくり傍に歩み寄ると、片手でトーマスの顔面を押さえ付けた。同時にボブの身体がやっと解放され、ボブはその場に倒れこむ。

《うう…ぐああ！》

エリクソンに顔面を握りつぶされんくらいの力で掴まれ、トーマスはうめき声をあげる。

「へっ…。苦しいかよ？人間以下に成り下がったテメエも苦しむもんなんだなあ？」

エリクソンは片手でトーマスの顔面を掴み、身体ごと軽々と上に持ち上げる。

《……うぐぐ……ぐ》

トーマスの身体は地面から足が離れ、宙に浮く形となる。

（なっ……）  
サムスは目を見張った。自分でさえトーマスの暴走を抑えると

ころか、引きはがすことさえ出来なかったのに。

突然現れた細身の若者に、どこにそんな力があるのだろうか。

「き…君は……」

「…」

サムスの言葉を無視し、エリクソンはさらに腕に力を込める。

《うぎゃああああ　！！》

トーマスは足をばたつかせてもがき苦しむ。

「き、君！そんなことしたらトーマスが死んでしまう！！」

「…あ？とうに死んでるだろ。だからこうして　」

サムスンに一瞥もくれず、エリクソンは一気にトーマスの頭を握りつぶした！

瞬間、バタバタと脳の破片や頭蓋骨のカケラが無惨に辺りに飛び散った。血液は一滴たりとも出てこない。

「…あーあ。手が汚れた」

首から下だけになったトーマスの身体を地面に投げ捨て、エリクソンは自分の服で手を拭う。そして、じろりとその深紅の瞳でボブを見つめた。

「…ひい…！！」

たった今、トーマスを殺された瞬間を目にしたボブは、エリクソンの獲物を捕らえるような鋭い視線に見つめられ、痛めた腕のことなど忘れて後ろに後退した。

「……てめえもだな」

エリクソンが静かな声で一步ボブに近づく。

サムスはエリクソンが何をしようとしているのかを悟り、すぐさま二人の間に割ってはいり、ボブを守るように立ち塞がった。

「き、君っ！ボブは正気だ！トーマ스에襲われていただけなんだ！  
！彼を殺す理由なんとなない！」

サムスの声は微かに震えている。

「……」

構わず、エリクソンはボブに手をのばす。

「ち、近づくな！この殺人犯め！！」

「……………。ハア…。もうそいつは手遅れだ。そのうち正気じゃなくなる。さっきの奴みたいにな。死にたくなかったらさっさとどきな」

「嫌だ！僕は医者だ！人を助ける使命が……………うぐっ」

視界が薄れる。

目の前が真っ暗になっていく。

（く…そ…）

サムスンはどんどん意識が遠退いていき……………その場に倒れた。

そして…。

「てめえも死ね。人間」

エリクソンが歩み寄り、彼に手をかざす。

「ひいいい…!!」

ボブが何か声をあげる前に、ザシュ…と風をきる音がして、彼は静かに息を引き取った。

「さて……………こいつらの根源はどこだあ……………」

## 救出

扉がミシミシと音をたてている。鍵も、蝶番も今にもはじけとびそうだ。ちようつがい

ナタリーは冷汗をかきながらバスルームで息を潜めている。

（扉が壊れたら誰だか知らないけど、決して善人じゃない人が入ってくるわ。そしたらあたしは…死ぬのかしら）

扉をぶち壊そうとしている者は人殺しか、誘拐犯か、あるいは空き巣か。

（空き巣がこんな物音たてないわ。前者のほうね、きっと）

叩きつけられ、歪んで今にもはずれそうな扉はもう限界だ。

時間稼ぎももう終わり。覚悟を決めなければならない。

（ 次の衝撃で扉は壊れる。来るわ ）

ナタリーは汗ばんだ手を胸の上でギュッと握りしめて覚悟を決める。

そして 。

バキヤアッ…！！

家が壊れてしまうのではないかと思うほどの大きな音と共に、脱衣所の扉は限界を迎え、ボタンと枠から外れて倒れた。

そしてズリッ…ズリッ…と床を引きずる足音が耳に響いてくる。

（ 来た。入ってくるわ 戦わなきゃ…戦わなきゃやられる ）  
しかし気持ちとは裏腹、身体が、手が、恐怖心に脅えカタカタ震え始める。

心臓が早鐘を打っている。覚悟したつもりなのに、侵入者と自分を隔てる壁が一枚壊されてしまったかと思うと、決意した心が簡単に折れてしまいそうになる。

（ナタリーすっかりしなさい。あたしは父様と母様のぶんまで生きるって決めたんだから。ここで人殺しに殺されるわけには行かないのよ。それに隙をつけば振り切れるかもしれないじゃない）

緊張する中、ナタリーはバスルームをぐるっと見渡した。

そしてあるものに目が止まった。

（そうだわ。これなら一瞬の隙について逃げられるかもしれない）  
頭に浮かんだ打開策。

これなら。

ナタリーはすぐに行動に移す。

もう侵入者がすぐそこまできている。

時間はなかった。

（早く早く！）

急がなければ！

狭いバスルームの切羽詰まった状況で、ナタリーはあるものを準備した。

そしてついにその瞬間が来た

：

ダァン！！！！

「きゃあー！」

凄まじい勢いでバスルームの扉が弾き壊される。まるで大砲の弾でも撃ち込まれたような衝撃だ。身構えていたナタリーでさえ、予想だになかったあまりの衝撃に耐えきれず、狭いバスルームの壁に華奢な身体を強く打ち付けることとなる。

「あうっ！」

少女は背中を強打し、床にずるりと崩れ落ちる。

「……っ……」

（……何？今の。人間の力じゃない）

何が起きたか分からない。けれど身体中が痛くて動けそうにないのは分かる。

激痛で意識が遠退きそうになる中、半開きの目で事態を把握しようとして試みる。

「………?!」

（な……）

ナタリーは絶句した。目の前の光景が嘘であって欲しいと切に願う。

（……なんで……）

そこにいるのは人殺しでも、空き巣でも、そもそも人間でもないものが存在していた。

カタカタと身体が震える。唇が急激に渴いて体温が低下していく。ナタリーに絶望が襲いかかる。

敵うわけない。

そもそも人間ですらない。

そう、獲物を仕留めた獣のような赤い瞳で見てくるコイツは……

下級バンパイア



「なん……で……なんで……?」

どうして狙われるのは自分なのか。目の前にたたずむ黒い化け物は荒い呼吸をし、口元からは、だらだらと涎を流してバスルームの床を汚している。初めて近くで見るとそれは、皮膚は黒く、よく見ると小さな突起が無数に広がっている。

頭は髪の毛は一切生えておらず、顔に鼻はない。エリクソンを思わせる深紅の瞳と左右にパッキリ裂けた大きな口があるだけだ。ただ、深紅の瞳はエリクソンのほうが遥に綺麗で妖艶な光を宿しているとナタリーは思う。

目の前の化け物は、ただ本能のままに獲物を喰うことに専念しており、瞳孔は開ききって完全に狂気の化け物でしかない。そのグロテスクな姿と全身を襲う恐怖に吐き気がする。

さっきまで隙をつけば逃げられるかもしれないという浅はかな考えはもうナタリーの脳裏にはない。

熱湯でもって相手を怯ませて逃げ出そうなんて。化け物相手に通じる策ではない。

「うつ……」

化け物がぼつぼつした黒い腕を伸ばし、ナタリーの首を掴んで持ち上げた。化け物は嫌らしく舌なめずりしてあたしを見てる。

（殺される。生き血を啜られて、あたしは死ぬんだ）

涎の垂れた汚い口元からのぞく鋭い牙。これに噛み付かれたら終わり。

（ここで死んだら、エリクからも開放されて父様と母様のもとに逝けるのかしら）

そんな考えが頭をよぎる。

そうだ。エリク。侵入者から逃れることばかり考えていて彼の存在をすっかり忘れていた。

今こそ彼の出番なのではないか。

けれど、彼は昨日から出かけていて一瞬もその姿を見ていない。

今朝だつて家の中に彼の気配は感じなかった。

（盟約だなんだつてあたしにうるさく言つてたくせに。肝心な時に来ないじゃない。馬鹿）

首を絞められ、意識が今度こそ消え入りそうになる中、呼吸もままならない状態でナタリーは精一杯悪態をついた。

死を目前に、通常ならもうあきらめているはずの状態。

だが、彼を思い出した途端もしかしたら来てくれるのではないかとナタリーの心は期待し始めていた。

それが化け物を目の前にしても、死を目の前にしても、悪態をつけるほどの生きる活力を彼女の中に呼び覚ましたのかもしれない。

（早く来なさいよ。エリク。あなたがわざわざ刻印までつけた人間は今にも殺されそうよ。いいの？それとも他に美味しい血液をもった人間でも見つけたわけ？もしそうだとしたらあたしを助けに来ないんだったら、これまであたしにした暴言と盟約違反で一生怨んでやるんだから！）

氣道をふさがれ、ヒュウヒュウと喉がなる。体から力が抜けていく。もう意識も持ちそうにない。

残された意識で壊されたバスルームの扉の奥を見つめても、エリクソンの姿はない。

化け物の腕に力がいり、いよいよ見るのもおぞましい顔がナタリーに近づいてくる。

（ああ…、もうダメ…）

ナタリーは力が抜け落ち、思い瞼を閉じた。

《ギャアアアア！！》

化け物の苦痛を訴える一声が響きわたる。

化け物は身悶え、床を転げ回る。ナタリーは床に落下し、咳き込む。

彼女を捕らえていた化け物の腕は綺麗に切断されていた。

彼女がそれを確認すると、頭上から聞き慣れた男の声が耳に入ってきた。

「まさかこんなところにいるとはな」

エリクソンはやれやれと化け物に向かって呟いた。そして足元に倒れているナタリーを見下ろし、弱弱しく見上げる彼女と目を合わせた。

「随分ぼろぼろにされてんな…」

エリクソンはその場にしゃがみ込むと、まるで彼女を労わるかのようにあおく痣になった首筋にそっと手を触れた。

温かい彼の手が、残された傷痕を確かめるように首を這う。

まだ呼吸が整っていない彼女は咳き込みながらおとなしくいつになく優しい彼の手の平を感じていた。

本当に心配してくれているのかと錯覚してしまうほど、それは優しい。ちゃんと来てくれた。そのことが素直に嬉しく、胸が安らぐ。盟約なのだからこれはエリクソンにとっては義務。当然のことだ。盟約を交わしたナタリーにとっても助ける行為は彼に与える血の代価として支払われるべき当然のことなのだ。

彼が盟約だからという理由で助けてくれるのだとしても、命を救

つてもらって喜ばない人間なんていないだろう。

（変なの。エリクがきてくれて嬉しいなんて。これは当たり前のことなのよ。それにあたしの血が欲しいからエリクはそうしているだけ）

それでも彼の温かい手が触れたところから、心身ともに緊迫が解けていく自分がいるのは事実だ。

（エリクがいてこんなに安心するなんて）

両親が亡くなってから、一人気丈に振る舞い、人に頼ることをやめた彼女にとってこんな気持ちになるのはカトレアという時以外では初めてのことだ。

（しかも相手はバンパイアなのに）

彼女自身、彼にこんな気持ちを少しでも感じてしまったことに戸惑いを隠せないのだった。

エリクソンは彼女の首の痕を確かめると、スクツと立ち上がり、のたうちまわっている化け物に向かって吐き捨てる。

「てめえ…、覚悟できてるんだろうな」

エリクソンはボキボキと手を鳴らして怒りを露にしている。

怒気をぶつけられた化け物はエリクソン睨みをきかせ、ぐっと身構える。だが、その目はまだナタリー一点を捕らえていた。

「余裕だなお前。俺に目えつけられてコイツを狙うとは良い度胸だ。その上、村の人間にまで手えだして……。こっちとしては無駄な労力つかうから嫌なんだっつ。なんとかしろ、その無駄な感染能力。これ以上面倒増やすな、下衆」

エリクソンなんて眼中なしの化け物に少々苛立ちを覚えたが、静かに右手を化け物に向け。

「死ね」

光の球が放たれたと同時に、  
化け物は声を出す間もなくあとかた  
もなく消え去った。

## 襲われた傷痕

気がついた時はナタリーは自室のベッドの上であった。そばにはブロンドのクセのある髪と碧の瞳をもった優しそうな顔した男のひと、カトレアがえぐえぐ泣きながら控えていた。男の人は村で唯一のお医者様のサム先生で、「おはよう。調子はどうだい？」と天使のような笑みを浮かべていて、心が少し和らいだ。カトレアはナタリーが目覚ますなり泣きながら跳びついてきて、「良かった。良かった」とそればかり連呼している。

どうして二人が部屋にいるのか状況が飲み込めなかったが、起き上がろうと身じろぎした時に全身に痛みが走って、自分に何が起ったのかのかを思い出す。

（あたし、そうだね。襲われて、首をしめられて……最悪）

先生は起き上がろうとするあたしを制し、ベッドで横になるよう促して優しく事情を説明してくれた。

バスルームでバンパイアに襲われた時、全身を強打したあたしは意識を失い、エリクに自室まで運ばれた。エリクは即、お医者様のサム先生を連れてきて診るように言ったそうだ。そのときサム先生は大変驚いたそう。なにせあたしは全身打撲に、身体は痣だらけ。骨折は無かったそうだが、首には締め付けられた手形がくつきりと残っていたのだから。

そこで真つ先にあたしの怪我の容疑をかけられたのはエリクだ。先生が疑いのまなざしでじろりとエリクを見回すと、意図を汲み取ったエリクは仏頂面で「俺じゃねえ」と言ったらしい。まあそんなんだけど。先生からみたらどう見ても相当な暴行を受けたとは思えない。先生はすぐさまエリクに問いただした。でも、彼は違うと言いつけ、サムスはあきらめてナタリー治療し、今に至ったそう。そしてカトレアにはナタリーが暴行にあったなどといえるわけもなく、事故と偽りの報告をし、家にきてもらっただけらしい。

（だからカトレアは君が事故にあったと思っているからね）  
最後にそう耳打ちして。

「そうだったんですか。ありがとうございます先生。カトレアも来てくれてありがとね」

「うう…当たり前よ。だって友達じゃない。あたし、あたし、びつくりしたのよ。あんたが全身打撲で痣だらけだって。事故にあったって聞いて。ああ、もう、本当に…。女の子なんだからもっと身体を大事にしろさい！」

カトレアは一喝すると泣きやむ様子もなく、ナタリーに抱きついて泣きじゃくった。こんなになくて心配してくれる人がある。

（あたしは一人じゃない。こんなにあたしを心配してくれる親友をもって、あたしは幸せね）

ナタリーは自分のために大粒の涙をこぼしてくれる友人に心がポツと温かくなるを感じた。

「ごめんね心配かけて。あたしは大丈夫よ。今はちょっと痛むけど、しばらく休めばまた動けるようになるわ。ねえ先生、そうでしょう？」

にこつと微笑んでみせる彼女につられ、サムスンもふつと笑みをこぼす。

「ああ。大丈夫だよ。でもまだまだ痛んでうごけないはずだから、完全に治るまではゆっくり休むんだよ」

「はい。ほらあ、あたしは大丈夫よ。そんなに泣かないでよ。死んだわけじゃないんだし」

「だあって…。ナタリーが事故にあつたなんて聞いて、しかも先生に急ぎ来るように言われて…。本当に生きた心地がしなかったのよ」

カトレアは顔をあげハンカチで涙をぬぐった。

隣からサムスンが申し訳なさそうにカトレアに謝罪する。

「あゝ…ごめんね。それは僕のせいだね。言い方がまずかったかな。彼女は無事だと伝えとけばよかったね」

サムスンは罰が悪そうにぼりぼりと頭をかく。そのしぐさが、大人にしては少し頼りなくて、それを良いことにカトレアはちょっぴり意地の悪い言い方をする。

「本当ですよ、先生。言葉には気をつけてください。あたし、びっくりしすぎて心臓が止まるかと思ったんですから。お医者様に言葉で殺されそうだったわ」

「ええ!!」

「ちょっと、カトレア、言いすぎ!」

ナタリーが注意すると、カトレアはごめん、とぺろっと可愛く舌を突き出してみせる。

「いやいやごめんね。僕も言葉が少なかったから。今度は気をつけるよ」

「そうしてください」



「こらっ！カトレア！」

途端、あはは、と三人の笑い声が響き、一時和やかなムードになる。カトレアからも涙は消え果ていた。

「あゝ、でも気がついてよかったわ。あたし、家族にもこのこと言っておくわ。ナタリーは無事よって」

「そうしてくれると嬉しいわ」

「あ！あたしそろそろ行くわね。家の手伝いをしにいかなきゃ。またお見舞いにくるから、今よりはマシになっててよね」

「ええ。約束するわ」

「じゃあ、先生も。あたしはこれで失礼しますね」

「うん。また」

ナタリーとサムスは去っていくカトレアを笑顔で見送った。二人は顔を見合わせるとまた、ふふと笑う。

「いいお友達だね」

「はい。カトレア以上に親友と呼べる人はいないくらいですから」

ナタリーは幸せそうに優しく微笑む。聖母が微笑むような慈愛に満ちた笑顔だった。

「さて、最後に首の包帯を巻きなおしてもいいかい？襟であまり見えないけど、痣は人に見せたくないだろう？」

「……。はい……」

ナタリーから笑顔が消えた。少しからだが震えている。暴行にあったときのことを思い出しているのだろう。そつと襟を開き、包帯でその痛々しい傷痕を覆い隠してやる。サムスンが診たところ、肩や背中 of 痣もひどいかったが、首筋についた手形の痣は特にひどかった。

（可哀想に。女の子がこんな目にあうなんて）

サムスンは彼女のことを思い、暴行されたことは公にせず、事故にあったということにしてくれていたのだ。

「はい。これで見えないと思うから」

キュツと包帯を留め具で固定し、サムスンは手を放した。

「ありがとうございます」

ナタリーはぺこりと頭をさげた。おもむろに部屋を見渡すと、「エリクは？」と尋ねてきた。エリクソン。その名を聞いた途端、サムスンの表情が曇る。なんとなく重い空気が流れる。

「あの、先生？」

訝しげにナタリーは首をかしげた。

「……。ナタリー、君に一つきいてもいいかい？」

「？はい」

突然真剣になるサムスンに、ナタリーはゴクリと唾をのんだ。

「君の恋人のエリクソン。彼は、人間なのかい？」

「えっ……」

ナタリーの心臓がとびはねた。

（どういう意味？先生はエリクの正体を知っているの？バンパイア  
ってこと知ってるの？）

「あ、あの…、それはどういう意味で……」

困惑して声が上がずる。サムスは彼がバンパイアと知っていつて  
いるのだろうか。だとしたらいつバレたのだろう。ナタリーには全  
く検討がつかない。彼は真剣だ。

「先生？」

声をかけても彼の反応はない。ナタリーはサムスンが言葉を発す  
るまでしばらく待つことにした。

サムスはカトレアを呼ぶ前のことを思い出していた。

エリクソンに気絶させられ、そう時間もたっていないころ。  
。

「おい、おきろ医者。今すぐ来い」

肩のあたりを蹴られ、無理やりおこされる。殴られた鳩尾が痛み、

う……とうめき声があがる。目が覚めて見上げれば、そこには鳩尾を打った張本人がたっていた。

「き、君は……。この、人殺し。ぐあっ」

頭を踏みつけられ、地面に顔をなすりつけられる。

「……だあれが人殺しだ。てめえには命を助けてもらったこと、感謝して欲しいくらいだぜ」

ぐりぐりと靴で踏みつけられ、右頬が擦れる。

「くっ……。なにが命を助けただ。君は罪もない人を二人も殺したじゃないか」

「馬鹿いえ。俺が助けてやったんだよ、医者。それより、てめえに今すぐ診て欲しい奴がいる。こい」

高圧的な物言いに、サムスは屈しないといわんばかりに睨みをきかせ、抵抗した。

「嫌だ！僕は人殺しの言うことなんかは聞かない！君の診て欲しい人だつてろくな奴じゃないんだろっ！だったら僕は死んでもそんな人診ないからな！」

サムスの必死の抵抗だった。しかしエリクソンの一言で、その言葉は180度覆させられることになる。

「ほあ……。地べたに頬なすりつけてる人間がよくもそんな口をきけたもんだ。大事な村人を助けるのがアンタの仕事なんじゃねえのか

よ

「何が言いたい」

「あんだ、ナタリーって奴は知ってんだろ？一人で気丈に振舞って、その反面よくべそかいてる女だ」

ナタリーという名を聞いた途端、サムスンの顔色が変わる。ナタリー…。ナタリー・ライアードのことか？

「思い出したか？そいつが今負傷してる。お前の仕事だ。はやく来い」

エリクソンは身を翻し、ついてくるように指示する。サムソンはそういわれては彼についていくしかない。そろそろと立ち上がり、彼についていく。その途中で殺された二人の遺体を確認しようとしたが、あとかたもなくなっていた。

（どういうことだ）

サムソンは目を見張った。二人の遺体はどこに？まさか幻だったとか？いや、そんなはずはない。確かに二人は目の前で殺されたのだ。

「き、君！―トーマスとボブは、一体どこに？」

どこに二人をやったのだ、という目で訴えると、彼は　。

「あの下衆どもなら今頃地獄じゃねえの？」

気味の悪い薄ら笑いを浮かべて、彼は言う。ぞくりと背筋に悪寒がはしった。

（な、なんだ。この人は。まるで悪魔だ）

不気味に笑う青年に、サムスンはおじけづくばかりだ。すっかり固まってしまったサムスンに、少し脅かしすぎたか？とエリクソンは少し声を和らげて言った。

「とにかく、ナタリーが怪我をした。俺じゃ診れない。代わりにあんたが診てくれ」

声のトーンが一変して、サムスンはハツとなる。

「……。分かった。すぐに診よう」

そうしてライタード家を訪ねてみたところ、彼女の身体は酷いありさまだった。全身は無残にも痣だらけ。どこもかしこも身体を強打していて、骨は奇跡的に折れてはいないものの白い肌は青痣の色に染まり、診てるこっちが痛々しかった。首には絞められたのである、手の痕がくつきりとなっていた。誰かが暴行を働いたに違いない。

（誰がこんなことを）

真っ先に思いついた犯人はすぐそばにいる青年だった。

「君は確か、ナタリーの恋人だっけ？」

「そうだ」

青年はぶっきらぼうに答えた。

「彼女のこの怪我はどう見ても誰かに暴行を受けたとしか思えない。君は彼女の第一人者だ。彼女はどこに倒れていたんだい？僕が呼ばれて駆けつけたときには既に君に自室に運ばれていたようだ……。

君が彼女を発見したとき、犯人らしき人は見たのかい？」

「…。見てねえよ。俺が倒れてるコイツを発見した。随分怪我してるみたいだから部屋に運んだんだ」

「

「本当に？もしか君が犯人だったりするんじゃないか？恋人に暴行を働く男は、…悲しいけど、現実にはいるからね」

サムスはエリクソンが犯人なのではないかと疑っていた。ほんの少し前にトーマスを無残なやり方で殺し、さらにはボブの命まで絶った。人を殺すことにためらいのないこんな恐ろしい男が、恋人である彼女に何もしいはずがない。まして今の会話からして負傷した彼女を労わる様子も、彼女をこんなふうにした犯人に憤りを見せるような態度もとらない。本当に彼女の恋人なのか？恋人の怪我を嘆きもせず、淡々と話す様子も怪しい。サムスの中でエリクソンの犯人疑惑は膨れ上がるばかりであった。

「恋人とは言っても、君は彼女を愛しているのか？とてもじゃないが、僕にはそうは見えない。…君が犯人なんじゃないのか。最近彼女とトラブルがあったとかはないか？本当に君じゃないのか？」

「……………」

サムスの質問にエリクソンは口をつぐんだ。トラブルがあったといえなかった。彼女を泣かせるようなことはした。けれどそれとこれとは別問題。全く関係ない。

「トラブルなんてなんも無いし、俺はコイツを傷つけてはいない。つーかお前は早く診察しろよ」

「……わかつてはいるが」

まだ疑いの消えない眼差しを向けてくるサムスンに、エリクソンは深く溜息をついた。

「あんたは…、あれだろ？さっき俺が人間を殺ったから俺を疑っているんだろ？だが違うぜ。さっきアイツらを殺ったのはそれなりに理由があつたからだ。医者やってんだつたらアンタにもわかつてるんじゃないのか？トーマスとかいう奴は既に死んでいた。なのに動いた。おかしいと思つたんじゃないのか？普通死んだ人間が生き返るか？そんなわけねえよなあ？」

「それは……」

エリクソンの言うとおりだ。サムスは騒ぎたてる村人の中でいち早くその異変に気づいた。脈もない。体温も感じられない。明らかに彼は死んでいた。だが、再び動きだした彼に生氣は感じずとも、本当に生き返つたのだとしたらその命を医者として、人間として再び死へと誘ふことなどできない。

「変だとは思つたさ。けれど、せつかく動き出した命の火を絶やすなんて、僕にはできない」

「はあゝご立派なことだな。そんなこと言つてると、あんた奴らのいい標的になるぜ？」

「君はさっきから何を言っているんだ？奴ら？トーマスとボブのことか？僕は君の言つてることが全く理解できない」



彼らを殺したことを感謝してほしいと青年は言った。意味が分らない。彼らを殺されて嬉しいわけがないからだ。

「あんたは…、知らないのか？ちんけな村だからなあ…。特別に教えてうやるよ。いま世間を騒がせている奴らの手にかかった人間の末路がアレ。それだけだ。奴らは人間の生き血をすすり、仲間を増やすのさ。あの二人は噛まれた時点で奴らの毒牙にかかり、人間としては終わっただ。だから殺した。これ以上人間の数を減らされても困るからな」

「……」

（毒牙。生き血？）

暴走したトーマスはボブに噛み付いていた。あれは腕を折ろうとしていたのではなく、ボブの生き血をすすろうとして襲っていたというのだろうか。

（そんな恐ろしいことが、あるのか…？）

「おしゃべりは終わりだ。…なにか考えているみたいだが、あんたの仕事は今はそのじゃないだろう？医者としてとつと働け」

深まる謎に神経が集中してしまい、目の前の患者の診察がすっかりとまってしまっていた。

（今やるべきことはナタリーの傷を癒すことだ）

そう言い聞かせ、彼は黙々と彼女の身体を調べ、処置を施したのである。

「よし。これで彼女が気がつけばあとは回復していくはずだ」

処置を終え、一息つくと、エリクソンは黙って部屋を出て行こう

としする。

「君、どこに行くんだ。ナタリーには頼りになる身寄りはいない。恋人である君がいなくなつてどうする」

一応引き止めてみたものの、彼は「仕事だ」と言つて出て行つてしまつた。

（仕事：？恋人より仕事を優先させるのか。なんて人だ）

とはいえ、意識のない彼女を一人にはできない。せめて彼女が目覚めるまで、と、彼女の親友であるカトレアを呼ぶことにしたのである。しかし、友人が酷い暴行をうけたと知つたら、同じ女性のカトレアは酷く傷つくかもしれない。ここは彼女のためのもと、ナタリーが事故にあつたと嘘をつくことにしたのだつた。

「あ、あの、先生？」

ナタリーの声にハツとした。エリクソンという青年に会つてからというもののどうも考え事ばかりしてしまう。

「あつ、ああ、ごめんね。変な質問しちゃつたね。いや、なんていうか彼、かっこいいよね。さつき会つただけど人間じゃないみたいに綺麗な顔してるよね。あつ、そうそう、彼、仕事があるとかでどこかに行つちやつたよ？忙しい人なんだね。君がこんなめにあつてゐるのに。あつ、また余計なこと言つちやつたかな？本当ごめんね」

「い、いえ……」

（なんだ。そういうことか。びつくりしたあ）

エリクソンの正体がばれてはいけない。もしばれたら、自分だけではなく彼も巻き込んでしまうことになる。それだけは嫌だった。

「一応診察も終わったし、僕は病棟に戻るね。他にも患者さんがくるかもしれないし。どこか痛むんだったらずぐ言っただよ？」

「はい。先生、ありがとうございました。お世話になりました」

「うん。じゃあね。あ、ひとつだけ。彼に会ったら僕があやまつていたと伝えてくれないかい？君を暴行したのは彼じゃないかと疑ってしまっただ」

「え！いいえ。違いますよ」

彼女の反応にやはり違ったか、と深く反省する。

「いや、申し訳ない。じゃあね。ナタリー。お大事に」

「はい」

そして一人になったナタリーはベッドに潜り込み、一休みすることにした。

（エリクはいないのか。仕事って言ってたみたいだけど……。それってアレ退治のことよね。今度は遅れてくんないって言わなきゃ。そうだ。くるのが遅くなってあたしが怪我したお詫びをさせなくちゃ。そうねえ、何にしようかしら）

布団に潜り込み、どうしようかとくすくす楽しみながらナタリーは思案にふけた。エリクソンのことだ。きつとお詫びをさせよう

としても言うことは聞かないだろう。それでも試しに言ってみよう。  
また喧嘩になるかもしれないけど。

## 隠

ナタリーがすうすうと寝付いたとき、家の外では騒ぎが起こっていた。早朝に起こったトーマスの死亡、そして生き返ったトーマスの暴走の件で、落ち着いた村人たちが屋外に出て集まり騒いでいたのだ。理由はトーマスとボブの二人の行方が分からないというもの、サムスン、トーマス、ボブを置いてそれぞれの家に逃げ込んだ村人たちは、その後三人がどうなったか誰も見ておらず、ただ外に出てみると現場には三人ともいなくなっていたので一体何があったのかと口々に意見を言い合っていたのである。トーマスは悪い憑き物がついて操られていたのではないかと、ボブは悪魔にとりつかれたトーマスに食われてしまったのではないかと。根拠のない空想話を繰り広げては恐ろしいと恐怖していた。

そこにちょうどナタリーを処置し終えてサムスンがおりかかる。村人たちは彼を捕まえると、あんたは無事だったのか、とか、二人の行方が分からない、何があったか知っているかと大勢でとり囲んで彼に問うたのだ。

「先生、あんた、二人と一緒にいただろう？あの後どうなったんだ？何があったんだ？」

自分たちは逃げたくせに、無償に知りたがる村人に少々呆れたサムスンだが、彼らは恐れをなして逃げ出しただけのこと。誰だつてわが身の命が一番可愛いに決まっている。自分だつてそうだ。もし暴走したトーマスに襲われたのが自分だったら、同じように逃げることを優先させるに決まっている。人間というものはそうなのだ。

「どうなんだ？先生。あんたがはトーマスをとめようとしていたよな？それで、どうなったんだい？」

「どう……と言われましても……」

サムスは返答に困った。彼らの行方は自分だって知らない。突然現れた青年に鳩尾をなぐられ気絶してしまったのだから。だから、気を失っていた間になにがあって二人の遺体は消えてしまったのかは謎だった。だが、考えられるのは二人を平気で殺した青年・エリクソンが何かしたとしかサムスンには考えつかなかった。

（彼は恐ろしい人間だ）

吐き捨てる暴言の数々も、いとも簡単に人間の頭蓋を潰したあの腕力も、彼の外見からは想像もつかないような身体能力になみなみならぬ力を感じ、サムスは畏怖した。そして、気がついたとき、二人の遺体が消え去っていたことを尋ねたときの、薄気味悪い笑み。

『あの下衆どもなら今頃地獄じゃねえの？』

今思い出しても寒気がする。あれは、人間の目じゃない。

まるで悪魔だ

「先生、二人のことでなにか知っているのかい？ねえ、そうなんだろう？なにか言っておくれよ」

顔色の悪いサムスンに何か感じとった婦人は、問い詰めて彼を追いつ立てる。彼女はボブの妻、リダだった。ふくよかな身体の大きな婦人で、ボブよりも強く、家庭では彼を尻にしているとの噂が絶えない元気な女性だ。彼女は騒ぎになったときは家で朝食の準備をしていて、現場にはいなかったそうだ。やじうまで外に飛び出していたボブが、すぐに帰ってくると軽く思っていたのだろう。しかしボブは帰らぬ人となってしまったのだ。サムスはボブがどうなっ

たか知っている。彼は行方不明じゃない。エリクソンに殺されたのだ。

リダと顔を見合わせると、彼女は涙を浮かべ、今にも泣き崩れてしまいそうな顔をしている。夫がいなくなったと聞いて不安なのだろう。その悲痛な叫びがサムスンにもひしひしと伝わってくる。

（行方不明か。それならまだどこかで生きているかもしれないという希望がもてたのに……）

本当のことを言うべきか否か。

サムスンはすばやく思考をめぐらせたが、自分の言葉を信じてくれるかも分らない。なにより、不安定な今の彼女に彼は殺されたということを伝えるのは、サムスンには辛過ぎた。だから。

「……いいえ。知りません。なにも知りません。僕は気を失っていたんです。途中で鳩尾を殴られて、僕は気絶しました。目が覚めたときには二人は既にいなくなっていましたから……。僕にも分らないのです」

（嘘だ。僕は知ってる）

精一杯何も知らないと嘘をつく、彼女は一瞬腑に落ちない、という表情をしたが、分らないといっている以上何もいえない。そうかい……と暗い声でそうつぶやくと身を翻してとぼとぼと歩いていってしまった。

（ごめんなさい。ミセス・リダ。僕はあんな酷なことをあなたに告げることはできそうにない）

心の中で謝罪すると、リダと同じように群がっていた村人たちは騒ぎたててすまないねと言い残して散り散り去っていった。皆、後姿が暗い。

（ごめんなさい。みんな。でも、このことは知らないほうがいいと思うんだ。あんな悪魔みたいな男のことも、二人の死も）

胸の中に鉛が溜まる思いがする。重くて苦しい。だがそのほうが

いい。サムスは真実を胸に秘め、身を翻して診療所に向かった。

その日、夜まで二人の搜索は続いたが、誰も二人の手がかりをつかむことはできなかった。



## 悲観

どうにかしてあの高飛車バンパイアにお詫びをさせたい！あたしはそれ一心で思案し、それが楽しくてワクワクしてしまい、テンションが上がってなかなか寝付けないでいた。1番エリクにやらせたいのはこれ。有り得ないけど、エリクを床に土下座させて「駆け付けるのが大変遅くなり、ナタリー様の美しいお身体に傷をつけてしまったことをどうかお許し下さい」って言わせて、あたしはどうするかって言うところ……。

もちろん許してあげないの！

土下座するエリクの頭を踏ん付けて、「出来の悪いバンパイアはあたしの用心棒には必要ないわ」なんて言って、お払い箱。バイバイ。エリク。もう戻ってこなくていいよ。あ、ついでに世界中の下級バンパイアもやつつけて帰ってよね。人間界にはかなり不必要だから。

……てな訳で、あたしは全身打撲したせいで頭も一時的におかしくなっていたんだと思う。そんな変な妄想を布団被りながらげげへ考えていたんだから。

…気持ち悪いわねあたし…。でもそんな妄想もいつの間にか飽きて、気づかないうちにぐっすり寝入ってた。当たり前だ。身体は人生で一番傷ついて、休息を欲しているのだ。夢なんて見ないくらい深い眠りについて、時間の感覚も分らないくらい眠ったと思う。気がついた時は多分夜中。外、真っ暗だったから。部屋のカーテンは閉まっていて、誰かが閉めてくれたんだあってばけーつと見つめてた。まだ眠気で覚醒してない頭で考えて、喉が渴いていることに気づくのに十秒くらいかかってしまった。水が飲みたくてあちこち

痛む身体を押さえてベッドから降り、キッチンに向かって足を引きずりながら歩き始めた。全身じんじん痛くて部屋のドアノブまで歩いていくのも一苦勞。いつもの元気がないぶん、扉が遠く感じた。扉があたしから遠ざかっていつてるんじゃないかって思うくらい、遠く。やっとの思いで辿りついたけど、キッチンまでの道のりは長い。一番難関の階段を降りて、広いリビングを横切ってやっとキッチン。イメージしただけで疲れる。でも頼れるのはあたしただけから。一人で生きてくことはそういうことだからって魔法のように唱えて、ガチャって扉を開けた。あたしはその時扉に重心をかけすぎて勢いよく開いた扉に合わせて前にズッコケてしまう。前に倒れる身体を咄嗟に庇った腕や足から、衝撃が走り、全身に痛みが走って廊下で小さく縮こまった。あちこち痛くて言葉も出ない。なんだか自分が凄く惨めに思えて、少し涙が出る。水を飲みに行くことすらこんなに苦勞するなんて。

少し泣いて顔をあげると周りは夜だから真っ暗。廊下の隅の方は暗くて何にも見えない。暗い、真っ黒な世界はあたしを襲った奴を連想させる。そう考えると何もかもが怖くなる。家の中が安全だなわけではない。あたしが襲われた時、どっちも屋内だった。一回目は教会の中で。二回目は家の中。まさか自宅で化け物に襲われるなんて誰が思うだろう。危険は外だけにあらず。あたしは家の中にいても外にいても安らぐ生活を送れない。不本意だけどエリクがいないと奴に出くわした時、あたしだけじゃ絶対太刀打ちできない。あたしじゃ蚊ほどの抵抗も出来ないのに、エリクは片手だけで遊ぶように余裕で奴をやっつけてた。雲泥の差ってこういうことを言うのね。だからエリクはあたし（人間）を馬鹿にするのかも。力の差ってやつをようくしらしめてくれたお陰であたしはその事、よく分かったわ。…ようくね…。

自分で自分にそう納得させたら、胸の奥がズキッと締め付けられた。

（おかしいわ、あたし。冷静に考えたらエリクがあたしを助けてく

れたのはそういう当てつけだったり、あたしの血が欲しいからだけに決まってるのに。なのに……)

『随分ぼろぼろにされたな……』

まるであたしを労るかのように優しく手を差し出してきた事が凄く嬉しかったなんて。でもその理由がきつとあたしのことを‘思っ  
て’したことじゃなく、自分の‘利益のため’にしたのだとしたら、  
そう考えたらとてつもなく胸が痛くなって、体中の痛みなんかよりも痛い。この気持ちは何？どうしてあたしはエリクに‘優しくされた’のが嬉しかったの？そんなこと、エリクが本気でするはずないのに。

考えれば考えるほど彼の意図は読みとれなくて。訳の分からない感情に悩まされて、廊下で肩を抱きながらまた泣いた。今までこんなに泣くことも、誰かの仕草でこんなに悩むことも無かった。最近の自分は何だか弱い。ナタリーはそう感じていた。エリクソンという圧倒的強者が現れてから、あたしは弱者として振り回されっぱなし。エリクがいなかった時は、精神面では村の中では誰よりも強いと思ってるし、人一倍頑張って強く生きなきゃ、て思ってた。弱い自分を人に見せてはならない。見せたらあたしの強みとしての部分が全部消えて無くなってしまふ。そしたら天国の父様と母様が心配する。カトレアもきつと心配する。だから駄目。あたしなんかのために他の人に迷惑をかけちゃ駄目。そう思っ  
て強く強く、って。

なのに、エリクはそんな必死なあたしをことごとく攻撃して、ボ口を出させようとしてくる。あたしの築きあげた強い精神を崩して、人間の弱さを突いて、どんなに気張っても誰かと手を取りあわなきゃ生きていけない人間なのだと認めさせようとしてくる。俺にはかなわないって。そして弱者のあたしはやがて強者に助けを求め、強者の足元に縋り付くのだ。

(あなたの思惑どおりよ。あたしはあなたの力無しじゃ生きてけな

い弱い人間。そう認めさせたら、あたしは嫌でもあなたに縋り付いて助けをこうでしょう？そうしたら盟約通り。契約成立よね。あたしはあなたのために生きる家畜も同然だわ)

だからあの優しさもきつと偽り。あたしを盟約に縛りつけるためのひと芝居。でもやっぱりそう考えると悲しくなつて。訳がわかない。また泣きたくなつて、喉が渴いてるはずなのに瞳からはボロボロと大粒の涙が零れてきて……。

辛い。こんなに辛い初めて。誰かに助けを求めたくなる。どんなに頑張つても、あたしは弱い人間だから。誰か、来て。そばにいて。

「何やってんだよ。こんなところで」

突然ふつてきた言葉。

なんでよりもよつてこの人なんだろう。あんまり会いたくないのに。この人には屈したくないのに。弱い所見せたくないのに。ああ、最悪だ。今のあたしはエリクから見ても最高に大笑いしたくなるような状態に違いない。水が飲みたいのに身体が痛くて動けない。その上寝間着姿で廊下で泣きじゃくつて顔はぐちゃぐちゃ。

最悪

(笑えばいいじゃない。いつもみたいに高圧的な口ぶり。最高に惨めなあたしをののしれど？いっつもあたしに言つてたように。お前なんかそうやって地べたを這いつくばつて生きる家畜だって。言えばいいじゃない)

もう、あたしは弱い部分を隠そうともしなかった。もうこの時のあたしは自暴自棄になっていた。

隠したって仕様がな。笑えばいい。笑え。笑え。呪文のように繰り返す。

予めそうなることを予想しておかないと、本当にそうだった時のダメージが大きくなってしまふから。

でも。

エリクはあたしの予想に反して何も言っでこなかった。そしてゆったりとした歩調で廊下に座り込むあたしの傍まで来ると、何も言わずにあたしを抱き上げ部屋に戻そうとしたのだ。

「きゃあ。やだ。降ろして。あたしは行かなきゃいけなきゃ所があるの」

突然の行動にあたしは驚いて痛む身体をばたつかせる。

「うるせー。耳元で騒ぐな。何が行く所があるだ。大袈裟な。動けないで泣いてたくせに。大人しくしてろ」

そう言っであたしの頭を軽く小突いてあたしを黙らせる。

「……………っ……。おろしてよお…。あたし水飲みにいきたいだけなんだからあ…」

駄々っ子のように身体をばたつかせて抵抗するあたしは本当にかっこ悪い。でもエリクはあたしが抵抗しても降ろしてくれなくて、ようやく離してもらったと思ったら、そこはベッドの上だった。

そしてエリクは静かに踵を返してどこかに行ってしまう。何だったの？

また布団を抜け出して部屋を出て行こうとしたらちょうど部屋に

入ってきたエリクに捕まって、またベッドに連れ戻された。

「ったく。寝てろつつうの。ほら。水」

ぶつきらぼうに差し出されたのはコップに入った一杯の水。あたしのためにもってきてくれたの？

驚いてなかなか受け取らないあたしにじれったさを覚えたのか、エリクはあたしの手をとり、無理やりコップを手渡した。

「…ありがとう…」

素直にお礼を言って、コップの中で揺れる透明な液体をじっとみていた。そしてコクリと喉に流し込む。泣いて枯れた喉に冷たい水が通ってからだの芯から全身が潤っていく感覚だ。ただの水なのに、すごくおいしい。

「落ち着いたかよ」

「…うん」

まだ目を真つ赤にして泣いてるあたしの様子を伺いつつ、エリクは一気に飲み干して空になったコップを奪い去ると、あたしを横に寝かしつけてぼそりと言った。

「……………な。……………さ…て」

「…え？」

聞き返したときにはもうエリクは部屋を出て行った後で。

エリクって呼んでみたけど、彼は戻ってこなくて。隣の部屋の扉がパタンって閉じる音がした。自分の部屋に戻ったみたい。

あたしはゆっくり体を横にすると布団をかけてしばらく天井を見つめていた。

あたしの頭はエリク言葉を信じられない思いでずっと繰り返してた。

だってエリクよ？人間のこと馬鹿にしてて、指図されたらキレてすぐ怒るような奴なのよ？

でも、その言葉は、あたしの耳には彼の初めての謝罪の言葉に聞こえた。あのエリクが謝罪なんてまさか。ううん。

でもちゃんとした謝罪の言葉だった。

幻なんかじゃない。

「…悪かったな。怪我させて…」

思いもよらない言葉に、さっきまでのあたしの悲観的な考えも涙も一斉にふつとんで、あたしはただ目をぱちくりさせているだけだった。

## 奇妙な朝食

ぐ……きゅるるる…。

「……………」

情けない音が部屋に響いては消えた。

「お…お腹すいたあ」

あたしは今ベッドの中。 たった今起きたばかりで、それと同時に  
急激な空腹に情けないお腹の音を鳴らしていたところ。 それもその  
はず。 あたしは昨日から今朝にかけて眠ってるばかりで何も栄養  
になるものを口にしていないからだ。 口にしたとすれば、昨夜エリ  
クがもってきてくれたお水一杯。 喉は潤ったけど、お腹はちっとも  
満たされていない。 満たされても朝になったらお腹は空くんだけど  
ね。

さて、どうしようか。

……………。

「あたしが作るしかないじゃない」

朝方からカトレアが来てくれるのを待つとかちよっと考えちゃっ  
たけど、やっぱり人に頼ろうとするのは良くないと思うの。 助けて  
もらえるのは確かに嬉しいけど、頼ってばかりじゃ申し訳ないし、  
こんなあたしのためにわざわざ…すみませんって考えてしまうから。  
それに朝から来てもらおうだなんて甘ったれもいいところじゃない？



皆人それぞれ生活のサイクルがあつて、特に朝なんて大忙し。そんな時に他人の世話なんて。うん。

やっぱり悪い気がする。

あたしも一日休んだし、もしかしたら昨日よりは身体もマシになつてるかもしれないし。

カトレアはまた来てくれるって言ったけど、朝ご飯くらい自分できちんとかしてみよう。

ナタリーはそう決意し、思い切つて上体を起こしてみた。正確には起こそうとしてみたで終わったのだが。

「……っ……!!。痛い……。」

身体を起こそうとほんの少し、ほんの少しだけ筋肉に力を入れてみただけだった。身体を横にしていた時にはあまり分らない、激痛が背中や首にはしつたのである。ナタリーはすぐに横たえた。やわらかい布団に沈み込む。

「なにこれもう……、最悪」

ナタリーはこの痛みに耐えて、また起き上がろうと試みた。ズキズキ痛みはするものの、空腹のほうが勝っている。

「なにか食べないと死んじゃう……」

大げさだが、ナタリーはそのくらい空腹を感じていた。

「ごはん食べたい……。お腹すいた……。」

ぶつぶつとごはん…ごはん…と連発しながらやつとのこととで起き上がる。その時隣でガタリという音がした。思わずびくりと身体がはねる。

ナタリーは咄嗟に音のした真っ白い壁を見つめた。一枚の壁で隔てられたその先はエリクソンがいる（出かけて留守のときのほうが多い）。

また何かやらかしてるのかしら。

しかし、前に彼の部屋をのぞいた時は綺麗に整っていて、使ってる形跡がないくらい綺麗だった。

何か物を落としたとか、彼の足音が少し大きかったとかそんな感じだろう。

取るに足らないこと、そう思った。  
が。

「どわああー!!」

エリクソンの叫び声とともにドスン!と大きな物音がした。

な、なにしてんのよ……。

盗み聞きする趣味はないが、何が起こっているのか気になる。身体が充分に動かせない今、余計に気になってしまう。

なんだろう? ナタリーはそうつと耳を壁に押し付けてみた。

「……キュイ!!」

………キュイ?

エリクソンの声? にしては甲高すぎて気持ち悪い。ナタリーにはその声が小鳥とかリスとか、小動物系の鳴き声に聞こえてならない。ペットでも飼う気だろうか。いやまさかエリクソンに限ってそん

なことは……。

ナタリーは確かめるようにもう一度耳を壁にくつつけた。

「キュイー!!キュイー!!」

相変わらず小動物系の甲高い鳴き声が絶え間なく聞こえてくる。  
その様子からしてあせっているようだ。

「てめえ、おとなしく死ね!喰われる!」

(え……)

物騒な声が聞こえてくる。

ちよつと待つて。エリク何やってるのよ。まさかあいつ、可愛い小動物を捕まえて頃殺す気!?

ナタリーの頭の中にはもやもやと可愛い子リスがエリクに尻尾を捕まれて鳴き叫んでる様子が思いうかんだ。

(いやああ!リスが!リスが死んじゃう!あのバンパイアに殺されるー!)

これは大変だと、ナタリーは壁を叩いて隣にいるエリクソンに向かって大声で叫んだ。

「あんたー!何やってんのよお!可愛い小動物捕まえて苛めてんじやないわよ!」

すると壁越しに返事が返ってくる。

「は?小動物?なに言っただお前」

「いいから早く!その子を離しなさい!」

「馬鹿かお前。せつかくの食料みすみす逃がすか」

「食料って…。子リスを食べる奴がどこにいのよー!」

「何勘違いしてんだよお前。」

気がつくときュイキュイと鳴いていた声が聞こえてこない。

（まさか……殺されちゃったの……？）

子リスが……、なんの罪もない子リスが……。

ナタリーの頭の中には非道なバンパイアの手の平の中で息絶えた子リスの映像が。

「最低！最低最低最低！」

「うるせーな。なにが最低だ。感謝して欲しいくらいだ」

「感謝して欲しいって、何？まさかそれをあたしに食べさせる気じや。いやよ、小動物なんか食べないわよ。なにが感謝よ。馬鹿！この馬鹿バンパイア！」

「失礼な奴だな。昨日はめそめそ泣いてたくせに」

ボタンと音がして、スタスタと足音が聞こえてくる。

そしてノックもせずにエリクソンは勝手に扉を開けて中に入ってきた。

「いやー！もう！リスの死体なんて見たくない！」

「だからさっきから何言ってるんだよお前は。リスじゃねーし。これだ。よく見る！」

そう言っただけで目の前に差し出されたのは気持ち悪い口のついた椰子の実のようなもの。まさか、小動物だと思ってた鳴き声ってこれの発したものだっただけ？

「ひっ」

気色悪い物体を目の前に出されて目を伏せた。

「気持ち悪い！捨てて！」

「捨てるか！喰うんだ。つーかお前が喰え。」

エリクはその気持ちの悪い木の実についている口を手でもぎ取ると、さらに二つに割って片方を差し出してきた。中身は果物のような果肉がついていて、でも気持ちの悪いそれは濃い紫色をしていた。どう見ても食べ物には見えない。なかなか受け取ろうとしないナタリーに無理やり片方を持たせて、自分は部屋にあった椅子をひっぱり出してそこに座ると、長い脚を組んでもむろにそれ食べ始めた。シャクシャクと音を立てて食べる様子は、りんごでも食べているような感覚で。エリクはお前も早く食べよといわんばかりの視線をなげかけながらそれを食べている。

「……知らないこれ。」

「いいから喰え」

「不味そうだし、身体に毒って感じの色してるわ」

「毒だったら俺食ってねえし。」

「でもやつぱり……」

知らない、と言いかけてお腹がぎゅる…と鳴って、顔が熱くなるのを感じた。エリクはもうほとんど食べかけていて、美味しそうに平らげてしまった。あたしはもう空腹の限界で、その気持ちの悪いものを勇気を振り絞って少しだけかじってみた。

シャク…と歯切れの良い音がして、次の瞬間芳醇な甘酸っぱい香りが口いっぱいに広がった。

まるで苺でも食べてるような感覚だ。

「あ……おいしい」

つい口に出してしまった。こんな気色の悪いものを食べさせられて美味しいなんて言いたくなかったけど、空腹感に負けて食べてみたら本当に美味しかったから。

あたしはエリクが見守る中、シャクシャク音を立てながら少しずつ食べていった。

食べ終わった後、ひとつ疑問に残ることがあった。  
それは。

「なんでエリクがあたしの世話してんの」  
「別に」

（出た。別に。どうせあたしには分かてるんだから。あなたがどういうつもりでこんなことするかなんて）

「あの…。昨日もだけど、ありがと。助けてくれたり、お水もってきてくれたり…」  
「……………」

ああ、あたしは何を言っているんだろう。御礼なんて言ってるし。きっとこれは借りだ、とか言ってからあたしの血を絞るとるに違いないわ。

「そういえばあなた、最近血、飲んでないけど大丈夫なの」  
「ほあ。吸われないのか」

お礼言ったら黙ったくせに、こっちには食いついた。現金な奴。

「吸われたくは無いけど、そういう盟約だもの…。いいわよ。少しぐらい」

自ら襟をまくり首筋を差し出した。その行動にエリクが目を見張る。あたしは今回は別に吸われてもかまわないって思えたからじつと動かず彼に首筋を差し出した。ナタリーの首にはまだくつきり残る手形と、エリクがつけた赤い文様が入っている。エリクは眉をひそめ、しかしゆっくりと顔を近づけてきた。お礼のつもり、だった。

「いい心構えだが、これでもいいってのか」  
「？」

不意に首についた手形に合わせるように、エリクがあたしの首を驚掴みにする。

「つつつ……！」

電流がはしったように痛みが走る。首が絞まるほど強く掴まれてるわけじゃない。軽く握りしめるような感覚。なのに苦しくてものすごく痛く感じる。化け物に一番痛めつけられたのは首だった。本当に死ぬんじゃないかって思うくらい首を絞められて……。また怖くなる。

パツと首から手が離れて、苦しみから解放される。いつの間にか目じりに涙が溜まっていた。

「たったこれだけでそんだけ痛そうにしてたら、俺が牙を突き立てた時にや、お前死ぬぐらい痛いんじゃないかねえの？」

エリクは長い脚を組み替えて言う。確かにそうかも知れない。すごく痛かった。

「……」

「別にお前に心配されるほど俺はヤワじゃねえし、血ぐらいしばらく吸わなくなつて生きてける。余計なこと考える暇あつたらつとと治せ」

エリクがあたしの頭をポンて叩いた。

「……うん。……わかつてる」

わかつてる。わかつてるわよ。

早く治して、いつもみたいに血を思いっきり吸いたいものね。でも、そんなふうになると、あたし何か勘違いしそう。優しくされてるなんて思っちゃうでしょ。違つて分かつてても。

「なるほど。そういうことでしたのね」

「ああ。そういうこと……へ？」  
「え？」

綺麗な、透き通つた声が聞こえたような気がした。空耳？ 思つただけ違うみたい。

「だ、誰？」

いつの間にかあたしの部屋の中に立っていたのは長く白い髪。月光が人の形をとって現れたのではないかと見まごうほどの透き通つた柔らかな肌。紫水晶のような瞳。服は髪と同様、純白のフリルのはいったドレスを身に着けていた。ドレスと言ってもパーティドレ



スというよりワンピースといったほうが近い。どこのお姫様だろうかと思うほど美しいその人は、あたしとエリクを交互に見てにっこりと微笑んで見せた。

「こんにちは。ナタリーさん」

「え…。どうしてあたしの名前…」

あたしの名前をぴたりと言い当てた美女は、今度は頭をかかえているエリクに向かって話しかけた。

「ナタリーさんって、人間でしたのね。どうりでお話してくださらないわけですね」

うふふ、と悪戯っぽく笑う美女に、何故かエリクは困ったような顔をしていて。頭が？になってるあたしには何がなんだかわからない。

「あの、どちら様ですか？」

「あら。わたくしのこと教えていませんのね。わたくしシルビアと言いますの。エリクソンの婚約者ですね」

この美女が、エリクのこ、婚約者—————？！

## 風変わりな彼女

親愛なるお父様、お母様

二人が亡くなってからはや二年。ナタリーは相変わらず元気になっています。規則正しい生活と人としての善良の心を忘れず毎日を送っています。悪いことは一切してません。

なのに何故でしょう？

一体いつからでしょうか？

清く正しく生きてきたつもりなのに、これは神様の悪戯なのでしょ  
うか。

あたしの周りには人ではない人達が寄ってくるようになりました。今日もこれまた綺麗な女のバンパイアの方が一人家にやってきました。しかもすでに家に生息中のオスのバンパイアの婚約者なのだとおっしゃってます。

はあ、そうですか

としか言いようがないのですが……。ふう

お父様、お母様、どうか教えて下さい。次から次へと人外の人達に絡まれるあたしは、これから一体どうしたら良いんでしょうか……

「ナタリーさん。ナタリーさん？」

「……。…は！？はいっ」

透き通る声に呼ばれて気がつくと、目の前には眉を寄せて心配そうにあたしを見つめる綺麗な顔が。

ああ、どうやらあたしはしばらく意識を両親のもとに飛ばしていたみたいです。

相当ぼけーっとしてたんだと思う。数メートルは離れた距離にいた彼女が、ベッドのすぐ傍まで来ていたのだから。

そりゃそうよ。

ここ最近エリクソンに出会ってからというものの心臓に悪くなるような出来事ばかり立て続けに起きて、心も身体もようやく本調子を取り戻してきた頃にまた新しいバンパイアが現れるんだもの。（しかもいつの間にか勝手に上がりこんでることが多いし……）

しかもエリクソンの婚約者ですか。あたしと名ばかり恋人のエリクソンの偽りではない、本物の彼女さんとかじゃなく結婚相手ですか。人生の伴侶ね。そこまで進んでる人がいたのね。

なのにそんな相手がいながらどうしてこの男は平気であたしの恋人なんかやってるのかしら。

普通に考えて浮気じゃない。

この馬鹿。

ジロリと傍に腰掛けるエリクソンを睨みつける。

でもあたしの睨みなど全く気づいていない様子で。この馬鹿は婚約者が来ているというのに全く無関心。いつもの調子で退屈そうに欠伸なんかしてる。ちょっと…あんたの婚約者じゃない。あんた相手しなさいよ。

そう目で訴えかけると、彼は視線に気づくが、何睨んでるんだと途端に不機嫌そうな顔つきになる。

もうっ、このお馬鹿は！

なんであんたがそんな顔するのよ。面倒事次から次へと降ってきて迷惑してるのはこっちだってば。

苛々しながら二人睨み合っていると、クスリと笑みが聞こえてくる。

「二人とも、そんなに見つめあって。ふふ、仲が宜しいですわね」

「「はあ!？」」

エリクソンとあたしは一斉に彼女の方に振り向く。

今の睨み合いが何故見つめ合いに見えるのか。おかしな冗談はおやめください。

それに仮にそう見えたとして、自分の婚約者が他の女と見つめ合っ  
つてて、嫉妬を感じるとかじゃなくそれどころか逆にどうして嬉し  
そうに笑うのですか。

謎すぎる……。

「…あの…今のは見つめ合ってたんじゃないかって睨み合ってたんです」

「あら、それでもわたくしはエリクソンとそんなふうに見えっこな

どした時がありませんから、親しいのかと思つたのですが。違いますの？」

おいおいおい。お姉様。

完全にズッコケてますよ。

全然違いますよ。

「いいえ。違います。ちょっと事情があつてエリクとは一緒に住んですが、そんな親しい関係じゃないので、婚約者さんは安心して下さい」

最初からあたしとエリクの間にはなんの関係もないことを言っておかなくては。そう思つて言つたのに。  
なのに……。

彼女、一瞬驚いたように大きく目を見開いたと思つたら、パアアツとあたしが目を開けていられなくなるくらいまばゆい表情にみるみる変わつていつて。

明らかに人が歓喜する時のような顔なのけど……そんなに嬉しかったのかしら……ね？

ま、嬉しいか。

エリクが浮気してたわけじゃないって分かつたんだし。

「まあ！ナタリーさん、エリクソンと一緒に住んでらっしゃるの？」

……え？

なんでそこに反応するの？

そこは「良かった。安心しましたわ」とかじゃなくて？

彼女と会話を交わせれば交わすほど予想外の会話の展開にだんだん疲労がたまってくる。

言葉は通じていないわけではないのに、自分の考える常識に当て嵌まらなくてヤキモキする。

いやでも、同居してますなんて言ったら反応するか。

あたしは力が抜けるように背中から倒れてベッドに沈み込んだ。

ああ……少し休みたい。

ちよつと疲れた。

ごろりと体を横に倒すと、さっきまでそこにいたはずのエリクソンはおらず、木で出来た簡素な造りの椅子だけが視界に入ってきた。

何処にいったのだろうか？

目をぱちくりさせてそれを眺めていると、

「エリクソンは先程部屋を出て行きましたわ」

と綺麗な声が降って、あたしは咄嗟に声の主のほうに振り向いた。いつの間に？！気配しなかったけど！とういか自分の客づらい自分で面倒みる――！

ふつつつと怒りが湧き上がってくる。

しかし当の本人がいないのでそれもできやしない。

「あの、それならいいんですか？追いかけてなくて」

そういえばエリクが出て行ったの気付いてたら何故とめないの

すかシルビアさん。

貴女の婚約者が出ていったんですよ？

「大丈夫ですわ。少し出掛けたのでしよう。そのうちすぐ戻ってきますわ。」

まるであたしを諭すかのように言う彼女。

彼がいなくなったというのに寂しいとか、彼をおいかけするような素振りをちつとも見せない。

まあ、いつも勝手に一人で行動することが多い彼だから慣れてるのかしらね？

それにしても素っ気ない気がするんだけど……。

疑問に思っていると、彼女はあたしの心が読めるの？と問いたくなるくらいあたしの感じた疑問にぴったりの答えをくれる。

「エリクソンを追いかけないわたくしが変わっている。そう思っているらっしゃるでしょう？」

「……………！」

ぴたりと言い当てられて咄嗟に言葉を返せなかったあたしは馬鹿だ。沈黙なんて肯定以外の何者でもないではないか。

「わたくしは今日、エリクソンに用があつたわけではありませんわ。違う方に用事があつたこちらに來ましたの。何故わたくしがここへ來たのか、聞いてくださる？」

まるで頼みごとをするように胸の前で手をあわせて聞いてくる。聞いてくださる？って……………、初対面の人のそんな事情を聞いてもいいものだろうか？いや、普通は聞かないだろう。

というか、何故エリクじゃなくあたしなのか？って疑問があるし、  
こういう展開って、なんとなく話を進めたあと、それとなく面倒  
くさそうな用件を頼まれてしまう典型的なパターンじゃないか？っ  
て思うんだけど……。 （本とかで読んだとね）面倒なことはご免  
よ。バンパイアに関わった時点でもう沢山なのに、これ以上あたし  
に何を求めるといふのか。

あたしの人生はすでに狂わされているのよ？貴方達のせいで！

あたしの夢みる人生っていうのは！この村で静かで平和に、村人  
Aとして死ぬまで静かに生きていくこと。それともしいい人にめぐ  
り会えたら、その人と一緒になって子供を3人くらいつくって平和  
な一般家庭を築いく。

それだけの願いなの！

べつにお父さんとお母さんを生き返らせて！とか子供じみた無茶  
なお願いなんて神様にはしていないはんだからね！！

なのに、それなのに、それだけの願いすらも叶わないような気す  
るのよ。エリクに会った時点で！

しかし、目の前でお願いのポーズをする女性をあたしが放ってお  
けるはずもなくて。

「話を聞いただけなら……」

反射的に口走っていた。

もう馬鹿ーーーーー！！あたしの馬鹿ーーーーー！！

これだからバンパイアとの面倒事が絶えないのよあたし！

頭では分かっているのに、人間にせよバンパイアにせよお願いな  
んでされたら「断る」が出来ないわ。だってこんな綺麗なお顔で  
見つめるんだもの。

無理でしょ。



それに話を聞くだけみたいだし。それなら……ね。

「まあ！聞いてくださるの？ナタリーさん、なんて優しいのでしょう！嬉しいですわ。ではさっそく……」

ぱああ！つと彼女の顔が明るく華やいで本当に嬉しそうにする。表情豊かね。

と、思いながら抱いていた抱き枕をだきしめなおす。

そして彼女は今は空きになった椅子に腰をかけると、ひとつ咳払いをして話す準備をする。

なんだかそんなに準備されると、これからそんなに長くて重い話をされるのかと不安になってくるじゃない。

と、ここで彼女の目あたしの目がばつちりと合わさる。

どうやらそのお話とやらが始まるらしい。

「では、聞いてくださないな」

その静かで落ち着きのある気品のある声に、あたしの喉がゴクリとなる。

エリクという婚約者をよそにあたしに聞いて欲しい話って、一体？！

## 彼女の話して？（１）

「実はですね、ナタリーさん」

彼女がコホンと咳払いをして言う。

うるさい男がいないので静かな真昼の空間に彼女の声が響いた。

「実はわたくし、人間界にいるある男性に会いにきましたの。」

「男性？」

男性と聞いて秒速で思い浮かんだのはエリクソンだった。

だつてつい先刻婚約者だと言っていたし、男性だし？一応彼と会つて嬉しそうだったし？

「それは、エリクのことですか？だつたら追いかけたほうが…」

咄嗟に出た質問だけど、彼女は首を横にふり、違つただけ答えた。  
じゃあ親戚かしら？もしかしたら友人とかもしれない。

けれど、なんでその人に会いにきたことをあたしに話すのかは全くわからない。

「エリクソンじゃありません。その方は、わたくしのお慕いしている方なのですわ」

「え？お慕いつて……。」

やや古風な言い方で一瞬考えちゃったけど、それって好きって意味で、シルビアさんの好きな人は婚約者のエリクソンじゃなくて、

別にいるっていうこと？

「好きな人…ですか？」

そう返すと、彼女は少し頬を赤らめてしおらしく「そうですわ」と答えた。

へえ……。好きな人かあ。はにかんじやって、恋する乙女って感じでかわいいわね！。

少々照れて赤みを帯びた頬を隠すように両手で覆い隠す彼女が、その美しい容姿にプラスされてかわいらしい。

と、悠長なことを考えていたあたしだったけど、それって、ちょっとマズインじゃない？

婚約者がいるのに別に好きな人がいるなんて。

いやまて。

あ！もしかしたら！

頭の中に何かがピーンときた。

これはインスピレーションってやつじゃないかしら！

これはまだ仮だけど、もしかしてシルビアさん、別に好きな人がありながら、実は家のために政略結婚させられそうになってるかわいそうな人だったりするんじゃない？……？？

ハッ！

そうよ！でなきゃあんな煩くて口の悪いエリクソンと結婚なんて考えないでしょ！

うんうん。それで、シルビアさんはどうにかこの結婚を取りやめにしたんだけど、出来なくてあたしに相談してるんだわ。きっとだって胸に恋心を秘めたまま好きでもないやつと結婚とか女にと

つては悲しすぎるもので、同じ女であるあたしに意見を求めにきたってわけね。エリクに言っただけしょうもなさそうだし。だいたいエリクが繊細な乙女心を分かるはずもないし。だったら、あたしに出来ることは彼女が身の内に隠している思いを聞いてあげることだわ。良いアドバイスが出来れば良いけれど……。

ええい！ともかく！

そんな境遇の人がいるのに放っておけるわけがないわ。

さあ。シルビアさん！とりあえずそのモヤモヤした気持ちを全部あたしに吐き出しちゃってー……！！

ガタリ

椅子が鳴る音が響く。

途中からだか、いつの間にかあたしの心の声は喉を伝わって言葉となり、外へと飛び出ていたみたいだ。

急に声を荒げたあたしに驚いて椅子に座った彼女が身体をのけ反らせているのが見えた。

それと同時にふふと爽やかな笑みをたたえと、彼女はでは続きを。と言って体勢を整えたのだった。

しかし、あたしの勝手な憶測がやはりただの妄想話であっけなく終わり、同時に鼻血が出るくらい恥ずかしくなるのもそのすぐ後だった。

昼。

シルビアから逃げるようにしてライード家から抜け出したエリクソンは、村人の水資源となっている井戸の縁に腰かけていた。ちようど村の中央に位置するこの場所は、ささやかだが市場もあるため人通りが多い。昼の、日中で最も陽が昇る時間帯なので、子供らは駆け回って遊び、大人達はその様子を見守りつつ各々の仕事に精を注いでいた。たまに井戸の水を汲みに村人が寄ってきて、男なら「やあ！」と気さくに声をかけ、女なら（村娘なら）エリクソンと目が合っただけではにかみ顔になりながらも「こんにちは」と挨拶は欠かさずに水を汲んで去っていく。

どの村人も明るく前向きで生きる力に満ち溢れているのが特徴だった。自然に恵まれ、綺麗な空気を吸い、穏やかにのびのびと出来る環境にあるからだろう。それが人々の心を落ち着かせ、住人の少ないこの村でも互いを思いやり助けあって生きていこうという活力を与えてくれるのだ。

エリクソンはすつと背を反らして伸びをする。

昼の暖かい日差しが彼を照らし、その心地好さに欠伸が出た。眠い。

帰って一眠りしようか。

ナタリーが使っていると言ったいつもの部屋を思い浮かべる。ナタリーの部屋とほぼ同じ構造で、部屋の向きが彼女の部屋と対称的になっているあの部屋だ。

正直あまり使ってはいない。

寝るためにベッドだけは使っているが、外に出かけて“例の奴ら”を狩り行っていることのほうが多いのでまったく生活感のない空間のままだろう。

それに何故かあの部屋で一人でいるより、階下に降りて昼間たいてい彼女がいるリビングのソファで寝そべってるほうが暇つぶしになるのでそちらの方が居心地が良い気がした。ソファも意外と良いものだし。

（ああ、でも駄目か……。シルビアがいるんだった。きつとあいつは今頃ベラベラしゃべってる頃だから煩くてまだあそこじゃ安眠できねえ）

リビングで寝そべっていたら彼女らの話し声が聞こえてくる。そうしたらきつと気が散って寝付けない。

（静かな所行くか）

そう思い場所を移動しようと立ちあがりかけたエリクソンの身体にふと影が落ちる。

また村人が井戸の水を汲みにきたのだろうか？

だとしたら邪魔になるし、そろそろ避けるか。と、スッと顔をあげ目の前に立った村人を見つめてエリクソンは固まった。

「……………」

「……………やあ……………」

村人にしては珍しく元氣のないか細い声。だが、彼が持つブロードの少しクセのある髪と、碧の瞳という容姿にはとても見覚えがあった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8708g/>

---

血の盟約

2011年3月5日13時49分発行